

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 騎士を目指す者 ~

十五夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS 騎士を目指す者

### 【コード】

N0070W

### 【作者名】

十五夜

### 【あらすじ】

魔力変換資質『炎』と古代ベルカ式魔導師、扱うデバイスのフォームは剣である見習い騎士の青少年。彼は自分の上位版であるシグナムを憧れていた。これは六課が設立し、シグナムの下で働く事になった彼の成長の話。

## 第一話

「はあっ！」

振り下ろされた剣が閃く。

「ぐっ！」

金属がぶつかる音を立てながら、反応出来るギリギリの速度で振り下ろされた剣を剣で受け止めると同時に剣を斜めに傾けて、剣を受け止めた衝撃を受け流す。

やはり、強い。殆どの衝撃を逃がした筈なのに剣を握る両手が痺れている。真っ正面からぶつかり合ったら、そう何度も剣を交えぬうちに両手が痺れて使い物にならなくなってしまふ様な重い一撃を彼女は当たり前前の様に振るってくる。

そんな当たり前の様に速く重い一撃を振るう彼女に対抗するにはただ防御に徹して重い一撃を受け流し、彼女が硬直した一瞬の隙を狙うのみ。

「そこっ！」

受け流す事によって完全に振り下ろされた剣を振り上げる準備に入った一瞬の硬直。

その隙を見逃さず、思い切り彼女に向かって体当たり。両手が痺れて剣が振るえない、次に来る彼女の振り上げた剣を受け止めきれぬ

と思わないからこそその苦肉の策。これで互いに体勢を崩すから、一度、距離を置いて体勢立て直す筈。

「あまいつ!」

「嘘っ!」

肩からぶつかって行った僕を受け止めながら彼女と視線が合った瞬間、彼女がニヤリと笑った。

刹那、彼女の頭が僕の顔面に直撃する。

目の前が一瞬だけ見えなくなる。顔面に向けて頭突きなんて流石に予想外だ。

僕が怯んだ一瞬、それでも彼女にとってはその一瞬の間に体勢を立て直す事は簡単な事。

それで勝負は終わり。気が付いた頃には重い衝撃を受けて麻痺していた両手から握っていた剣が空を舞い、彼女の持つ剣が喉元に突き付けられていた。

「ま、まいりました……」

「そっか……」

降伏を告げる僕の宣言を聞くと彼女は頷いて、剣を鞘に納める。

「どっでしようか?」

凜とした面立ちで佇む彼女　シグナムさんに僕は先程の感想を求めめる。

ジロリとこちらを見るシグナムさんの表情は固い。

「どうもこうも話にならん。剣士が剣を弾き飛ばされてどうする」

「はい……」

シグナムさんの指摘に僕は項垂れる。格上が相手だろうがなんだろうが剣士が戦いの中で剣を手放す。アドバイスがどうこうの以前に論外だ。

「だが、まあ、最後の体当たり、結果はどうあれ良い判断だった事は間違いない」

「はいっ！」

項垂れる僕を見兼ねたのか、シグナムさんの言葉と表情は少しだけ穏やかなモノになっていた。

「うわあ、頭突きってシグナム、一応女の子なんやから……」

二人の模擬戦を観戦していたはやては一緒のテーブルでお茶をしていたカリムに向けて苦笑いを向ける。

「あの子は貴女の御眼鏡に適ったかしら？」

「ああ、その辺は問題ないかな、新人であれだけシグナムとやれるんなら大丈夫や。やつぱり、指導しとる人がええからかな？」

「いえ、恥ずかしいかぎりです。剣士が戦いの最中に剣を手放すなど……。もう少し教育が必要な様です……」

カリムの問い掛けに頷きながら、はやては青年と呼ぶには若く、少年と呼ぶには憚られる年頃の彼の師匠であるシャツハに視線を向けるとシャツハは不甲斐無い弟子に呆れた表情を浮かべている。

「あはは、大丈夫ですよ。六課設立で揃えた新人では一番完成に近いですし、シグナムに懐いとる様ですから、交替部隊でもやっていけると思います。それより本当に大丈夫なんか？」

「ええ、特例と言えば特例だけど、六課出向はあの子本人の希望でもあるから。扱う魔法は古代ベルカ式、デバイスの基本フォームは剣、魔力変換資質『炎』を持ったあの子にとってシグナムは自分の完成系の一つ。シグナムのようになるにしろ、別の完成系を見つけるにしろ、あの子にとってシグナムの下で働くのは大きな転機になると思うの」

「それはお得意の占いで？」

「違うわ、そうね、しいて言うならあの子を見守ってきた一人としての鼻肩目かしら。教会に預けられた孤児の中でも魔力が強かった、適性が今は少ない古代ベルカ式だった。ただそれだけで皆があの子に期待して、あの子はそれに答えていった。期待が重荷に感じて逃げ出した事もあったけどあの子はちゃんとここに帰ってきた。期待

の重さを知って、挫折を知って、あの子はきっと強くなる、今よりももっとずっと強くなる。今はまだ強くなる為に強くなるうとしていられるけれど貴女達の下で色々学んで、何かを護る為に強くなる。そんな風に思ってくれる様になれば嬉しいの。これもあの子にとっては重荷で私の勝手な期待なんだけどね」

そう言っただけで柔らかい笑みを浮かべるカリムとカリムの言葉に頷いているシャツハを見て、はやては気持ちを引き締める。

はやても六課設立の前から彼の事を知っている。今だ、騎士見習いだが向上心はある、教会から将来的に立派な騎士になると期待されている。

直属の上司でシグナム、それに頼めばなのはやヴィータも指導してくれるだろう。

よっぽど間違った成長はしないだろうが成長期を預かる身としては責任重大である。

「それじゃあ、うちはこの辺で。あの子には待っている、シグナムには程々に帰ってくるよう伝えといて」

腕時計を見て時間を確認したはやてはシグナムに声をかけようとそちらに視線をやるがいつの間にかまた始まっていた模擬戦に溜息を吐くとカリムとシャツハにそう伝えると聖王教会を後にした。

## 第二話

「ええつと、どうすれば……」

機動六課設立の式が終わり、そのまま始まった食事で僕はぼつりと一人立ち尽くす。さっきまでは僕と同じ交替部隊の人達と色々話をしていただけれど料理もそこそこに食べたなら今から仮眠を取って来ると行つて男性寮に帰ってしまった。

本当は僕も仮眠を取りに部屋へ帰った方が良いと思うんだけどだからと言つてはいそうですか、で眠れるほど僕の生活リズムは狂っていない。このままだと初日から徹夜突入になつてしまふけど一日ぐらいなら大丈夫だろう。なるべく早く身体を夜行型にしないといけないな。

一人でうんうん頷いていたけどやっぱり寂しい。なんで新設部隊の割に皆それぞれグループみたいなのを作ってるんだらうか？もしかして皆さん知り合い同士なのかな？もしかしなくても聖王教会から出向してきた僕って浮いてる？唯一、僕の知り合いである八神家の皆さんは皆で集まって楽しそうに話をしている。誰か一人ぐらい僕を気にしてくれてもいいと思うんだけどな。特にはやてさん！一応、はやてさんからのスカウトですよね！

そんな僕の思いが通じたのか、縋る様な僕の視線に気付いたのか、シヤマルさんと視線があい、気付いた様子ではやてさんに声をかけて僕を指差す。

やっぱ良いよな、シヤマルさん。シグナムさんやヴィータさんは勿

論、ザフィーラさんとかは尊敬や憧れの騎士や守護獣って感じだけどシヤマルさんはこうなんて言うか、異性として憧れる。勿論、お近づきになりたいとかそういうゲスな感情じゃなくて普通の異性として見れると言うか。カリムさんとかシャツ八師匠も美人で異性だけどその前に尊敬の念が邪魔をする。いや、別にシヤマルさんを尊敬してないって訳じゃ無いけどね！……………、一体僕は誰に言い訳してるんだろうか。

僕がそんなくならない事を考えている内にはやてさんが笑いながらこちらに来てと手招きしている。

はやてさんの行動ではやてさん達のグループ皆が僕に視線を向けてくる。八神家の皆さんはああ、といった感じだけど栗色の髪をしたポニーテールだっけ？ ファッションに頓着が無かったのでよく解らない。とりあえず、栗色の髪の女性と金髪の女性が首を傾げてこっちを見ている。

と言うか、あそこのグループって六課の隊長陣とその他における主力メンバーじゃないか。

栗色の髪の女性が管理局でもエース・オブ・エースと名高い高町なのは一等空尉に金髪の女性はフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官。

どちらも基本的に聖王教会から出ない僕でも知っている超有名な魔導師だ。と言うか、さっきの式で隊長陣は自己紹介してたよね。

僕は自分が思ってるより新しい環境に緊張してるらしい。

シカトするのも失礼なので僕は隊長陣に近付くと頭を下げた挨拶する。八神家の皆さんには今更だけどなのはさんとフェイトさんは初

対面だし、節度も大切だろう。

「シズク・ローウエルです。聖王教会所属の見習い騎士ですがどうぞよろしくお願いします!」

「うん、よろしくな」

「はやてちゃん、こういうのは節度が大切ですよ」

緩いはやてさんの挨拶をシャルマルさんが指摘しながら八神家の皆さんとは挨拶を交わす。

「シズク・ローウエル?」

「どうしたの、なのは?」

「にははは、ううん、なんでもないよ、フェイトちゃん。なんか聞いた事ある様な無い様な気がただけだから。先ずは挨拶だね」  
にはははと笑うなのはさんとそれを心配したフェイトさんは僕の方を見ると柔らかい笑みから真面目な表情と雰囲気が変わる。

「一応、式でも自己紹介したけど高町なのは一等空尉です。名前で呼んでいいからね」

「私はフェイト・T・ハラオウン執務官です。よろしくね」

「えっと、なのはさんとフェイトさんで大丈夫ですか?」

「うん、大丈夫だよ」

僕の質問に笑顔で答えるのはさんと頷くフェイトさん。

うう、いかん。顔がにやけてしまう。美人は慣れたつもりだったけどやっぱりこつ無条件に笑顔を向けられると顔が緩む。

「シズク君、顔がにやけとるで」

「な、な、なに言ってるんですか、はやてさん！」

はやてさんが浮かべた意地悪な笑みとその言葉にボンツと音を立てて顔を赤くした。我ながら解りやすく動揺してしまった。

「お二人とも美人ですけど顔がにやけない様に我慢して  
あ  
っ  
っ」

完全に墓穴を掘った。二人とも恥ずかしそうに顔を見合わせてるし、はやてさんは爆笑している。シグナムさん達ははやてさんに呆れている様子だ。止めてくださいよ。

「うう……、もう、いいです……」

恥ずかしくてこれ以上は堪えられない。

「ああ、ちょっと待って。一つ確認したいんやけど……」

「なんですか？」

頭を下げて、げんなりしながら部屋に帰ろうとする僕を呼び止めるはやてさんにジト目を送りながら振り向く。

「ごめんごめん、真面目な話やから。シズク君、もし良かったらやけどなのはちゃんの教導受けてみいひん？」

舌をチロつと出して謝るはやてさん。卑怯だよな、はやてさんって絶対自分が美人な事自覚してるだろ。わざとらしいぶりっ子な行動だけど容姿が似合ってるから怒れない。むしろ、普通に可愛いなと思ってしまう。

それにしてもなのはさんの教導か……。興味が無いとは言わないけどシヤツ八師匠に一言言つて許可を貰うのが礼儀だと思っし、どうしよう。今でもシヤツ八師匠と一応シグナムさんにも師事してるんだ。ここでまた違う人に師事を仰いだらやっぱり失礼に。

「私やシスターシヤツ八は気にするな。師弟を重んじるのはお前の美点だが、そのせいで自分の才能や視野を狭くするのがお前の悪い所でもある」

視線が泳ぎまくっていた僕の心情はバレバレだった様でシグナムさんから色んな意味でありがたい言葉を頂戴する。

お墨付きを貰つて後押しされたら流石に腹も決まる。

「あの……なのはさん」

「うん、大丈夫だよ」

はやっ、即答だよ！ 一応、新人という事で四人の面倒を見る事が決まってるのに即答だよ。一人分、仕事を増やしちゃったけど大丈夫だろうか？

「あつ、なのはちゃん。一応、注意しとくけどシズク君は夜があるから昼までやで。流石に交替部隊の業務に差し支えるんやったら止めざる終えんで」

「もう、大丈夫だよ。はやてちゃん」

なのはさんに釘を刺すはやてさんの言葉に僕はハツとなる。そうだったそうだった、僕はここに修業に来てる訳じゃないんだ。見習い騎士だけど僕は一応、『完成した戦力』としてここに来てるのだ。『育てる為の戦力』としてここに来てる訳じゃない。

そこら辺の自覚だけはしっかりと持っておこう。

「今日は色々忙しいだろうし、詳しい話はまた明日ね」

「それじゃあ失礼します」

なのはさんの言葉に頷いた後、皆さんに頭を下げてグループを抜ける。

眠く無いから熟睡は無理でも昼寝ぐらいはしておこう。師事してもらうのに眠くて動けませんじゃ失礼にも程がある。

そんな事を思いながら僕は自分の部屋に向けて歩き出した。

## 第二話（後書き）

べっ、べっ、べっ、に名前をかかんがえるのが面倒な訳じゃないんだからねっ  
！

### 第三話

「えっと、グリフィスさん、これでいいんでしょうか？」

初めての勤務、静まり返った事務所で僕は書き終えた書類を手に持って交替部隊の指揮権を持つグリフィスさんに書類を提出する。

交替部隊　フォワード陣やロングアーチの皆さんが自由待機に入オフソフトっている場合の非常事態に備える為に設立された部隊。色々、本当は細かい所があるけど大雑把に言えば夜勤部隊と考えれば解りやすいと思う。

勿論、そうそうトラブルが起きる訳でも無し。起きたとしても基本的にはフォワード陣にスクランブルがかかり、それでも手が回らない時に出勤する言い方が悪いけど基本的に暇な部隊だ。

交替部隊の主な勤務は僕の様な『戦力』として来た人間には肩身の狭いデスクワークだ。

デスクワークが苦手という訳では無いけど聖王教会での僕の仕事はもっぱら観光客の案内や迷子探し、孤児院の子供の相手など基本的に身体を動かす事ばかりだからデスクワークはあんまり得意では無い。

「ええ、大丈夫ですよ。あつ、そろそろ食堂が開く頃ですね。皆さん、今日はこれくらいにしましょう」

僕が四苦八苦しながら作成した書類に目を通したグリフィスさんが頷いてそのまま書類を受け取ると外を見た後、時間を確認する。

グリフィスさんの言葉に釣られる様にして外を見る。

「うわぁ……」

真つ暗だった外は既に明るくなっていた。

「あつ、お疲れ様です！」

グリフィスさんの言葉を引き金に事務所から出ていく交替部隊の局長さんに頭を下げる。

おつかれ〜と返ってくる返事を聞きながらふうと一息付いた僕はグリフィスさんと視線が会う。

「もし良かったら朝食、いや、夕食かな？ 一緒に食べないかい？ この部隊は女性の割合が多いし、同年代の同性がいると助かるんだけど」

「あつ、大丈夫です。朝練まで時間はありますし、ぜひ。それにしてもやっぱり同じ事を考えてるんですね」

僕は時計を見て時間を確認するとグリフィスさんの言葉に頷く。交替部隊はベテランの男性局員が多いのであまり気にならなかったけど六課は基本的に女性局員の方が多い。そこに同性で同年代とつけば今の所、知り合いはグリフィスさんぐらいしかいない。グリフィスさんは助平なタイプではなさそうだけど少なからず気持ちは共有してくれるだろうから仲良くした方がいい。

そうして僕はグリフィスさんと他愛もない話をしながら食堂まで移

動するとパンとサラダとメインである肉料理を注文する。

向かい側に座るグリフィスさんが持つトレイの上にはパンとサラダとスープが乗っている。

「……………」

うむ、なんだろう、この同じ男なのに食べる量と種類の違いは。僕もグリフィスさんみたいな食事をすれば知的クールなイケメンになれるんだろうか？ まあ、どう考えても僕には物足りない量にしか見えないから真似しようとは思わないけど。

それに僕は身体資本の人間だから食べる時にしっかり食べる様にしておかないといけないのだ。うん、誰に言い訳してるんだろうね。

「どうかしたかい？」

「いやあ、こつも燃費が違うものかと思って……………」

僕の視線の先にある料理を見て、ああと納得したグリフィスさんが苦笑する。

「仕方ないんじゃないかな？ 僕はあんまり身体を動かす方じゃあ無いけど魔導師のシズクならそれぐらい平気だと思っよ。僕なんかより健康的でいいじゃないか」

「まっ、それもそうなんですけどね」

知的クールのイケメンが何を言っている。ツッコミを入れたかったけど流石にそこまでは仲良くなっていないので自重する。なんか釈

然としないけどとりあえず肉を一切れ口に放り込む。うん、美味い。  
……あつ、食事の前に祈るのを忘れてた。

「そう、それではやてさんが」

とりあえず共通の知人の話題から話を膨らませていこう。

結局、妙に馬が合って朝練に間に合うぎりぎりまで話込んでしまった。特に女の子の話とか異性の話とか。

また今度、紹介してくれるらしい。よし、やる気が出て来た。聖王教会でシスターの女の子達をそういう目で見たらキツイ仕置きが待っている。

だからこそ、六課にいる間になるべくたくさんの女の子とお近づきになっておこう。

僕はそんなどうしようもない事を考えながらグリフィスさんに頭を下げて朝練に遅れない様、訓練所に急いだ。

## 第四話

「すみません、お待たせしました！」

「まだ時間じゃないからそんなに慌てなくて大丈夫だよ」

陸士服から訓練服に着替えを済ませて訓練所に向かうと既に自分と同じ様に訓練服を着た四人となのはさんが集まっていた。

慌ててなのはさん達がいる所まで走って行った僕になのはさんは苦笑しながら答える。

「皆揃った事だし、簡単に自己紹介でもしよつか。フォワードの皆には昨日伝えたけど彼は聖王教会から出向してきたシズク・ローウエル君。交替部隊所属だから実際にフォワードの皆と現場に出る事は非常事態以外で無いと思うけど仲良くね。本人の希望で午前中だけけど訓練に参加する事になりました。勿論、シズク君には悪いけど皆の教導を優先したメニューに参加してもらおう事もあるけどそこは我慢してね？」

「はい、大丈夫です」

なのはさんの言葉に即答する。僕は参加させて貰う側の人間なんだからそれくらいは弁えている。

そう思いながら僕は僕と同じ様に訓練服を着た四人に視線をやる。

僕と殆ど同じぐらいであるう年頃の女の子二人と正直、前線で戦わせていいんだらうかと心配になるぐらい小さい男の子と女の子の二

人組。随分ちぐはぐなメンバーな気もするけどはやてさんが集めたメンバーなんだから潜在的な才能は相当なモノなんだろう。

それより、なのはさんが全部紹介してしまったけどやっぱり自分で自己紹介した方がいいんだろうな。

「聖王教会から出向してきましたシズク・ローウエルです。シズクと呼び捨てにしてください。暫定的に囑託魔導師となっています。まだまだ未熟者で教導に参加出来る様にして貰いました。皆さんの足を引つ張らない様に気を付けますのでどうぞよろしくお願いします」

背筋を伸ばし、大きな声ではきはきと。礼儀作法はシャツハ師匠のお陰でバツチリです。

「うん、シズク君の自己紹介も終わったし、フォワードの皆も一人ずつ簡単に自己紹介しようか。まずはスターズからね」

なのはさんの言葉に反応して僕と同じ年ぐらいであろう女の子二人組が姿勢を正す。

「スバル・ナカジマ二等陸士です。よろしくお願ひします！」

明るい笑顔で元気良く頭を下げる青い髪の子 スバルさん。  
うん、こつちまで元気付けられる眩しい笑顔を浮かべる女の子だ。  
聖王教会でお年寄りの相手をしたら大人気間違いなしだ。

「ティアナ・ランスター二等陸士です。よろしく」

二人目はオレンジ色の髪をした女の子　ティアナさん。さっきのスバルさんと違ってティアナさんは失礼な言い方だけどあくまで事務的に挨拶してくる。友好的だけどスバルさんの様に好意全開で接してくるタイプではなく、一步離れた所で人付き合いをするタイプだろう。

うん、これだけで二人がコンビの理由か解った気がする。

それにしても六課とは本当に僕のような未熟者には厳しい場所だ。なんでこんなに美人ばかりなんだ。より取り見取りじゃないか、キヤッホー！

ゴホン、流石に失礼過ぎるので心を落ち着かせよう。

「エ、エリオ・モンディアル三等陸士です。よろしくお願いします  
！」

少し緊張した様子で頭を下げてくる赤い髪の男の子　エリオ君。  
フォワードメンバー唯一の男の子だ。この年頃なら色々自覚してくる頃だろうし、仲良くしてあげよう。

やば、ちょっとだけ孤児院の糞餓鬼共を思い出してしまった。

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。そしてこの子が私の守護竜でフリードって言います」

最後に名乗ったピンチ色の髪の女の子　キャロちゃんと白い竜。

アルザスの竜召喚師、頭の中にその言葉が浮かんできた。竜は初めて見るけどなんて言うか、小さくて可愛い。

キャロちゃんの方も雰囲気でもいい子な事が解る。

それでも緊張した面持ちで敬礼しているエリオ君とキャロのコンビを見るとなんか和むわ。

なんだこの二人の面倒を見てあげたいと思う欲求は。未恐ろしい子供達だ。

とりあえず、頭を撫でてあげよう。

なでなで。

「シズク君？」

ハッ、僕の奇行になのはさんとスバルさん、ティアナさんが目を丸くしている。エリオ君とキャロちゃんは抵抗しないながらも気恥ずかしそうに顔を見合わせている。

「す、すいません。昔から子供の相手をしてたからつい……」

だから、どうした。関係無いじゃん。そう突っ込まれたら終わりである。昔から子供の相手をしていた事と頭を撫でる事になんの因果関係も無いのだから。

「とりあえず、今から訓練始めるからね」

「はい！」

なのはさんの言葉に返事をする。

僕の奇行にツッコミを入れる人がいなくて助かったとだけ言っておこう。

「フォワードの皆は昨日教えたコンビネーションの確認、シズク君はシグナムさん達に軽く聞いたけど実際、どこまでやれるか私と模倣戦でもしよっか」

.....えっ？

## 第四話（後書き）

なのは対シズク

結果は解りきってますけどね。

## 第五話

「それじゃあ行くよ！」

「はいっ！」

眼前には白いバリアジャケットを纏ったのはさんが空を飛んでいる。

なのはさんが僕と模擬戦を始めると言うてからの動きはとても早かった。

ここまで来たら仕方ない、目の前の事に集中するだけだ。

実力差だけを言えば一目瞭然、負けて当然、勝てる訳が無い。事實は事實、だけど今重要なのはそんな現実的な思考じゃない。

重要なのは相手に勝ちたいと思う気持ちと自分の全力を相手にぶつける事だけだ。

目を閉じて深呼吸　　思考をクリアに。日常から闘う為の思考に移行する。

この思いを闘志に変えて、今はただこの手が届く位置まで近付いて、僕の一撃をなのはさんに叩き付けるのみ。

「それじゃあ、スタート！」

「はあっ！」

模擬戦開始を告げる言葉と共になのはさんの背後に回り込んで剣を思い切り振り下ろす。

「うん、中々の踏み込みだね」

「ちっ！」

模擬戦開始直後の完全奇襲、なのはさんの背後に回り込んでの一撃はタイミングに威力、僕が出せる最高の一撃だった。

だけど、その一撃が届く事はなく、桜色のシールドが当たり前に僕の一撃を受け止めていた。

やはり、強い。僕の一撃を受け止めてもなのはさんの表情は明るく、嬉しそうに笑っている。僕の奇襲の上に叩き込んだ全力の一撃でも余裕の表情だ。

いつの間にか、舌打ちをしながら再び、なのはさんを守るシールドに一撃を叩き込む。

相手は格上のミッド式魔導師、卑怯臭い奇襲は防がれたけれど相手の懐に潜り込めた。それならこのチャンスに逃す訳にはいかない。距離を取られたらそれで終わりだ。

一度距離を取り、もう一度格上相手の懐に飛び込むのは至難の技だ。

狙うのは短期決戦、なのはさんに攻勢を許さず、僕が怒涛の攻撃でなのはさんを封殺する。

僕となのはさんの実力差で僕が勝てる可能性はそれしかない。僕の癖や特徴を知らない今だから出来る千載一遇のチャンスだ。

剣を振り下ろし、振り上げ、横に薙ぎ払い、遠慮無しの連続攻撃。

「くっ！」

それでもなお、桃色のシールドは僕の斬撃を受け止める。僕の圧倒的な攻勢なのに何故か追い詰められているのは僕の方だ。

全力を振るうのに身体が付いてこない訳じゃない、シャッハ師匠やシグナムさんにそんな柔な鍛え方をされていない。

僕が焦りを感じているのはそこじゃない。問題はなのはさんを守るシールドだ。

最初の奇襲、結果的には受け止められたけれどシールドの展開自体は明らかに遅れていた。

けれど今はもう違う。必要最低限の範囲と必要最低限の強度、未来予知が出来るのかと疑うほどの確なシールドの展開位置、まるで僕がわざわざシールドに攻撃を叩き込んでいる様な錯覚を覚えるこの攻防。

完全に把握された僕の癖や特徴、5分にも満たない間にほぼ全ての戦闘能力を把握された。

これがなのはさんのシグナムさん達がいる次元の実力。相手の特徴や癖をすぐに把握して対応する力。

文字通り、存在する次元が違う。

「炎熱加速っ！ シールドブレイクッ！」

刀身に炎を纏わせる。魔力を刀身に込めて僕の相棒が持つ唯一の補助魔法を発動させる。シールド破壊　なのはさんのシールドに通じるかどうか解らない。それでも可能性を高める為に炎を纏わせた。手詰まりだ、何故か防衛にまわっている筈なのはさんが主導権を握っているこの攻防を打破するにはなのはさんのシールドを正面から破壊するしかない。僕に出来る事は相手に近付いて一撃を叩き込む、それだけなのだから。

「ぶち破れっ！」

ただ真っすぐに振り下ろす。

展開されたシールドと剣がぶつかりあい、バチバチと火花を散らす。

この一撃を届かせる、その思いを高ぶらせ、両手に力を込める。

その思いが通じたのか、ミシッとシールドが音を立てて碎け散る。

よしっ、届い　　。

「うーん、思い切りや踏み込みは中々だけでもう少し周りに気を配った方がいいかな」

剣が迫っているのになのはさんは慌てた様子もなく残念そうに呟く。

「なっ！ バインドッ！」

本当になのはさんに届く寸前で剣が止まる。

シールドを破壊した瞬間に発動した新たな魔法。バインドによって拘束された両手が全く動かせない事を確認した後、なのはさんの咳き通り、周囲に視線をやる。

無数にある桃色の魔弾が僕を取り囲んでいた。

「ディバインッ！」

「ッ！ シールド展開！」

なのはさんが持つレイジングハートに魔力が集束する。

両手はバインドで固定されている。バインドを力づくで破壊しても僕を取り囲む魔弾のせいで逃げ場も無い。

終わった、頭を過ぎるその言葉、シールドを展開してせめての抵抗。

「バスターッ！」

放たれた砲撃はシールドをもともせず僕を飲み込む。

まさに一蹴、薄れていく意識の中でそう思い、僕は意識を手放した。

「ふう……」

地上に降りて一息吐いたのははレイジングハートを待機状態に戻すと自分の足元で魔力ダメージによって目を回しながら気絶しているシズクを見る。

短い時間であったが実際にシズクと戦ってみて、はやてちゃんやシグナムさんがシズク君に期待している意味が良く解った。

この子は強くなる、今はまだ足りないモノだらけだけれど必ず強くなる。そんな確信がなのはの胸の内を占めていた。

才能があるからとかそんな先天的なモノでは無い。もつと簡単な心の事だ。

自分が教導する教え子と模擬戦をする場合、大抵の教え子は負けて当然という心構えから始まる。それが悪いという訳では無い。勝敗にこだわる事はせず、自分の未熟な部分を発見して鍛えていこうと向上心から来る諦めだ。

そして同時に少数であるがシズクのように客観的に見れば負ける事が解つていても全力を賭けて自分に勝とうとする教え子も確かに存在する。どんな状況でも相手に勝つ為に全力を出す、評価に値する心構えであるがそういう教え子はシズクのように目の前に集中し過ぎてやる気が空回りする事も珍しくない。

模擬戦の心構えといっても一長一短だ。それでも確かに勝ちを狙って全力を出す少数が教導中に成長するのは確かだった。

それにシズクはよっぽど良い師匠に恵まれたのか、心のコントロールがよく出来ていた。

模擬戦が始まる前、深呼吸をして目を開いたシズクの瞳に宿った穏やかでありながら明確に勝ちを狙ってきた闘志をなのは感じて思わず嬉しくなつて笑ってしまった。

「うーん、それでもやっぱり一番の問題は目の前の事に集中し過ぎて視野が狭くなる突撃思考の矯正からかな」

気絶しているシズクを眺めながら育てがいのある新人が増えた事になのは嬉しくなり、笑みを浮かべた。

## 第五話（後書き）

ちやっかり空戦持ちのシズク。シズクが弱いんじゃないんです、なのはさんが強いんです。

## 第六話

「知らない天井だ……」

「あら、気が付いた」

気が付いたら知らない天井と言ってみた物の白衣を纏い、椅子に座って書類を書いていたシャマルさんと何処かツンツと鼻に来る薬品の匂いでここが医務室である事を確認する。

「うう……、そっか、僕は……」

全体的に重くて怠い身体に力を入れてベッドから身体を起こす。

「ああ、まだ無理しないの。なのはちゃんは魔力コントロールが上手だから身体的な痛みは無いと思うけど完璧な一撃を貰って魔力ダメージでノックアウトされたんだからまだ寝てなきゃ駄目よ」

身体を起こした僕に慌てて近付いてやんわりと肩を押してベッドに寝かせるシャマルさん。

ヤバい、仕事や人柄である事は解りきっているのにそんなに優しくされたら表情が緩んでしまいそうになる。

ベッドのある医務室で男女が二人きり、しかも特上の美人ときた、未熟な僕としてはついついイケない妄想をしそうになってしまう。

「ふう、それにしても強かったな……」

イケない思考を振り払い、僕はあの模擬戦を思い出す。手応えが無かった訳じゃない、奇襲になったけど最初の一撃やシールド破壊をした時は自分でも中々良い働きが出来たと思う。

そういえばはやてさん率いる隊長クラスには魔力のリミッター制限があるって話をグリフィスさんから聞いた気がする。

あれだけ強かったなのはさんも魔力出力だけで言えば僕と同等か少し上ぐらいだった筈だ。

それでも僕はなのはさんに一蹴された。生まれ持った才能や魔力資質だけじゃない。経験やそれに裏付けされた確かな実力、どれも僕が持たないモノだ。

そしてきちんと自分を鍛えれば得られるかも知れない物だ。それにシグナムさんが言っていた様々な戦い方を知るのに六課は適切な場所だ。シグナムさんは割と頻繁、ヴィータさんはたまにだけ頼めば模擬戦をしてくれる。僕が不足しているのはミッド式魔導師相手だ。なのはさんは勿論、フェイトさんも頼めば模擬戦してくれそうだった。

フォワードの皆もそれなりだろうし、僕と同等くらいか、格上に囲まれたこの環境は聖王教会にいた時よりも大分良い。聖王教会ではもっぱらシャツ八師匠にばこられるだけだった。

なのはさんに指摘されて気が付いたけど僕のデバイスにはシールド系が少ない、シャツ八師匠やシグナムさんと戦う時は大抵デバイスで受け止めていたし、ヴィータさんと戦う時は質量を伴う攻撃だからデバイスでどうにか対応していた。

その為にミッド式の様な数で攻めてくるタイプの対応は知らない。僕がまだ未熟でいかに相手を傷付けずに倒すかばかりに意識がいつていたけどそろそろステツプアップしてザフィーラさんに頼んで自分や護るべき人達を護る力を教わってもいいかもしれない。

誇れる事では無いけど僕はどちらかと言うと八神家の皆さんみたいな一点特化タイプでは無く、器用貧乏なタイプだから唯一、シャツ八師匠に才能があると言われた剣の道以外もサポート程度に身に付けた方が良さそうだ。シャツ八師匠に相談したら十年早いつて言われそうだけど相談して駄目と言われたら諦めよう。

「あつ……、そういえば僕はどこやってここに？ それにどれくらい寝てたんですか？」

そんな事を思いながらふと一番最初に気にしなければならぬ事に気付く。

僕はどちらかと言えば体格は良い方だ。なのはさん一人ではここまで運んで来れないだろう。

「シズク君はスバルに運ばれて来てたわよ。時間は大体二時間くらいじゃないかしら」

シャマルさんの言葉にふむと頷く。スバルさんにはお礼を言っておこう。訓練の時間を使わせちゃったみたいだし、それにしてもよくあの細腕で僕を運んでくれたな。普通に女の子の体格だったけど意外と力持ちなのかもしれない。

「あの……、それでいつまで寝ていれば？」

どうせ、今からだだと訓練も出来ない時間だし、仕事に合わせて睡眠を取るだけだから部屋に帰って寝たいんだけど。

人が近くにいる状態で寝るのは慣れていないけど比較的に好意を持っている異性に寝顔を見られるのは恥ずかしい。いやいや、でもシャルさんなら寝顔を見て頭を撫でてくれるぐらいの優しさはありそうだし、それはそれでありかもしれない。

「そうね、もうお昼だし、本当はまだここで休んで欲しいけど身体も動かせる様だし、御飯を食べたら真っ直ぐ部屋に帰って寝るって約束してくれるなら起きてても大丈夫にしようかしら」

「それなら大丈夫です。シャツ八師匠に口酸っぱく言われてますから。身体が資本の人間なら身体を虐めるだけじゃなくて、大切にすることを必要だつて」

無理をする事が必要な場面は確かに存在するけどそれは今じゃない。日常的に訓練で身体を虐めて、休息で大切に。この二つが重要な事はシャツ八師匠に師事する上で一番最初に教えられた。がむしやらに強くなりたかった時は何を言ってるんだと思っただけど今ならその必要性が十分理解出来る。

「ふふ、その言葉はなのはちゃんに教えてあげたいわね」

そう言ってシャルさんは微笑む。

やっぱりなのはさんにもそういう時期があったんだろうか？

うん、それにしてもやっぱりシャルマルさんは美人だ。

「それじゃあ失礼しますね」

まだ、少しだけ怠い身体を起こして医務室を後にする。これ以上、緩みそうになる表情を引き締めるのは無理そうだった。僕の周りにいる女性は美人が多いのに脇が甘いというか、男女の事に関して頓着が無いから困る。

僕は聖王教会の枯れた神父様みたいな人間では無く、年頃の狼にもなる男の子なんだから。そんなふしだらな事をする度胸は無いけど。

そんな事を思いながら僕は食堂に向かった。

## 第六話（後書き）

シズクは小さい頃からカリムやシャツハ、八神家と関わりがありませんから美人に対する耐性を持っています。がそれ以外は普通にスケベな男の子です。

## 第七話

『十年早いですね』

「……………」

思い立ったが吉日とばかりに食堂に向かう道すがらシャツ八師匠に通信を入れて、僕の器用貧乏万能化計画について相談したら即答された。

まあ、予想していた通りだけど少し凹む。

『と、本来なら言いたい所ですがそれは私しか貴方を教える事が出来ない場合です。ですが、今の貴方は六課という恵まれた場所にあります。六課には空戦を教えて貰っているシグナムさんの様に私では教えられないモノを持っている人達がたくさんいます。様々なモノに触れて経験する事は貴重ですから許しましょう。ただし、師事を受けるからにはきちん敬意を払って行動する様に』

「はいっ！」

しっかりと釘を刺してくるシャツ八師匠に向かって元気良く返事をする。

『ああ、それと今度から自分なりの意見があるなら相談してください。師事をする上で私が貴方に一方的に教えるのではなく、教え子である貴方がなりたい自分を見付けてくれたら助かります。なりたい自分が貴方と合わなかったら話し合っても修正出来ます』

からね。それでは今度会う時まで成長している事を望みます』

そう言っただけでシャツ八師匠は通信を切ってしまう。

ふむ、なりたいた自分を師事する相手に伝える。今まで何気なくシャツ八師匠の言う通りにしてきたけど自分の目標とする場所と師事する相手が導こうとする場所が違ったら歪みしか生まれないか。その事に気付いただけ僕は進歩出来たかも知れない。この事はなのはさんにもきちんと言葉をして相談に乗ってもらおう。

なのはさん、食堂に居てくれれば話は早いんだけどなあ。

「と言う事で僕の器用貧乏万能化計画なんですけど、どうでしょうか？」

「うん、確実に実力をつけるだけなら剣なら剣で一本に絞った方が良くと思うけど、確かにこの環境ならシズク君の言いたい事も解るし……、うん、決めた。そういう事ならシグナムさん達と話を詰めないといけないだろうけど六課にいる間はその方針でシズク君に指導するね」

「ありがとうございます」

食堂に着いた僕は丁度良く、フォワードの皆と一緒に食事をしてるなのはさんを見付けると料理を持ってそのテーブルにお邪魔させて貰った。とりあえず、スバルさんとエリオ君の食欲が異常である事は解った。

少し話した後、なのはさんに僕の器用貧乏万能化計画を相談したらなのはさんは真面目な表情になって話を聞いてくれた。

正直、あまり乗り気な表情では無かったけど認めてくれる辺り、あながち僕の意見は間違っただけで無いのかな？

「ううん、むしろお礼を言うのはこっちだよ。指導する上でなりたい自分があるって言うてくれるととっても助かるから。フォワードの皆も自分なりの意見とかあったらどんどん言ってきてね。今はまだ訓練についていっただけで大変だろうけどいずれシズク君みたいに話し合う事も必要になってくると思うから」

なのはさんの言葉にフォワードの皆は各自何か思う所があるのか、しんみりとした表情で頷いている。

なりたい自分、そしてなのはさんの様に指導のプロが客観的に見て判断するなれない自分、その差を埋めるにしても諦めるにしてもなのはさんの様なプロと相談するのはとても大切で重要な事かもしれない。

「あつ、忘れてたけどスバルさん、さっきはすいません、じゃなくてありがとうございますね。医務室まで運んでくれて助かりました。僕、重くなかったですか？」

なんだか湿っぽくなってしまった空気を変える為にフォワードで一番の元気印であるスバルさんに話を振る。ここは謝る場合じゃなくてお礼を言う場面だろう。

「えっ、あつ、全然大丈夫だよ。それに私が年下ですし、そんな丁

寧に話さなくて大丈夫です。良い話も聞かせて貰いましたし……。シズクさんは全然軽かったですしっ」

突然、話を振った事であわあわと焦り出したスバルさん。なんだか悪いことをした気分だけどちよつと可愛い。

それにしても丁寧か、基本的に僕の周りは敬う人しかいなかったから癖になってたけど丁寧な対応は壁みたいなものを作る原因なのかもしれない。

もう少し砕けた、孤児院の仲間と接する様な対応でいいのかな？

「うん、助かったよ、スバル。本当にありがとね」

「ふえっ」

にっこりと笑って改めてお礼を言う。

スバルさんは奇声を上げると食事していた手を止めて顔をほんのり赤く染める。

「？」

なのはさんとティアナさんは苦笑を浮かべて、エリオ君とキャロちやんは首を傾げている。

「あっ……………」

別に僕は色恋に鈍感という訳じゃない。本当に孤児院のノリでお礼を言ったけどよく考えてみたら、女性の下の名前を呼び捨てって親

しくも無い会って数日の男がする事じゃない。

「う、ごめん」

「だ、大丈夫です……」

うう……、自分の軽率さが恥ずかしい。多分、僕もスバルさんみたいに顔を赤くしているだろう。

テーブルから早く離れる為に食べた料理の味は勿論、覚えていない。

## 第七話（後書き）

あれ？いつのまにシズクにニコポ属性が？

## 第八話

「デバイスの整備ですか？」

「うん、シャーリーから言付けを預かっていてね。勿論、余計な手は入れないけどフォワードの皆に渡すデバイスを整備するついでに提出して欲しいと頼まれてね。なんでもこれからの訓練で必要になってくる仕掛けを組み込んでおきたいらしくてね」

僕の器用貧乏万能化計画が始まってから数日後、ようやく夜中に起きている事やデスクワークに慣れてきた頃、グリフィスさんに呼ばれてデバイスを提出する様に言われる。

僕の相棒はアームドデバイスであるブレイド、そのまんまの名前だけどシャーパ八師匠経由で聖王教会から配給されたブレイドに僕のネーミングセンスではカッコイイ名前が思い付かなかった。

ブラックシューターとかジャスティスファントムとか色々考えたけどことごとくシャーパ八師匠に却下された。

僕はシャーパ八師匠の反応から自分のネーミングセンスが無い事を悟るとカッコイイ名前を諦めてシンプルイズベストを狙ってブレイドと名付けた。待機状態はシルバーブレスレットとして常に左手に付けている。

整備してくれると言うなら組み込まれている魔法のプログラムも少し弄って貰おうかな？

今のブレイドだと攻撃に特化した魔法ばかりプログラムされているから扱えるかどうかは別にしても八神家の皆さんから少しづつ魔法を貰った方が良さだろう。

元々、そのつもりで器用貧乏万能化計画を始めた訳だし。

「解りました、渡しておいてください。それにしても仕掛けと言うのは？」

ブレイドを外してグリフィスさんに手渡しながら尋ねる。信頼していない訳じゃない、けどやっぱり自分の相棒に自分が知らない仕掛けを組み込まれると言われると不安になってしまう。

「心配するな、シズク、私達が相手をするガジェットについて話は聞いているだろう」

「あつ、お疲れ様です。はい、ガジェットについては一通り」

突然現れたシグナムさんにグリフィスさんと二人で慌てて頭を下げた後、シグナムさんの言葉に答える。

「通称、ガジェットドローン。目的は今だ不明であるが何かを探している事、その為の犠牲を気にしない事、間違っても善良な市民が善良な目的で動かしているものではあるまい。そして何より特徴的で管理局が頭を悩ませているのが……」

「AMF アンチマギングフィールド。強制的に魔力結合を解いてしまうAAAランクの魔法防御ですね」

「そつだ、そしてお前がここにいる理由でもある」

シグナムさんの言葉にしっかりと頷く。流石はやてさんと言った所か、交替部隊の武装局員は皆さんそれなりの修羅場を経験しているベテランだ。僕が模擬戦で挑んだとしても良いように手玉に取られる未来しか思い浮かばない様な人達だ。

それでも相性というのがある。皆さんはベテランであるが故に全員がミッド式魔導師だ。古代ベルカ式は勿論、比較的新しい近代ベルカ式魔導師もいない。

そしてミッド式魔導師にとってガジェットの持つAMFは鬼門である。

その為に物理的な破壊が出来る僕が交替部隊に招かれた。

「仕掛けというのは訓練中に疑似的にデバイスを制御する事でAMF状況下を作り出す為だ。安心しろ」

「解りました。ブレイドの事、よろしく願います」

シグナムさんの話を聞いて納得した僕はブレイドを手渡したグリフィスさんにもう一度頭を下げる。

なるほど、僕の様なベルカ式魔導師なら最悪殴って破壊する事も可能だろうけど威力増強には身体強化や武器自体の魔力に頼っている所が多い。

近付いて斬る。ただそれだけの動作だけど間違いなくAMF状況下に入るんだからその特殊な環境に慣れた方が良いかも知れない。

「それよりどうだ、久しぶりに？」

ふむふむと納得している僕にシグナムさんが握りこぶしを作って見せる。この合図は知っている。デバイスを使わない、徒手戦闘のお誘いだ。

徒手戦闘に関してはザフィーラさんが八神家一ではあるがシグナムさんも相当出来る。

「えっと、それは……」

「大丈夫ですよ、非常事態が起きた時にすぐさま動ける程度なら身体を動かして貰った方が良いでしょう……」

僕の助けを求める様な視線にグリフィスさんは苦笑しながら答える。どうやらシグナムさんの前では僕に救いの手を差し延べてくれないらしい。と言うか、多分、僕の助けを求める視線に気付いてない。

剣での戦闘なら僕も喜んで挑ませて貰うけど徒手戦闘となると気が引けてしまう。ザフィーラさんならまだしもシグナムさんの様な女性を殴るのは無理だ。

他の人からすればデバイスで切り掛かる方が酷いと思われるかもしれないがそこは一応、騎士としての心構えが出来ているから問題無い。

勿論、魔力抜きの徒手戦闘になると速度も技術もシグナムさんの方が遙かに上だけど単純な腕力だけなら性別の差で僕の方が上だ。

デバイス込みの力比べなら話にならないぐらい簡単にあしらわれるけど徒手戦闘の力比べになると大抵は僕が押し切る。

そういう時にぶつけ合った拳の柔らかさとか腕力の差でいつも凜としているシグナムさんも女性であると認識してしまつて大変やりにくい。

徒手戦闘中に僕の手があらぬ所に、なんてよこしまな想像も何度した事か。その度にその隙をつかれてボコボコにされるけど。その度によからぬ想像の事がばれているらしくシグナムさんから説教を受ける。

曰く、色香を使う違法魔導師が現れたらどうするつもりだとか。一度、素直に鼻を伸ばしますと答えたらシャツ八師匠とシグナムさんの二人にぶつ飛ばされた。

素直に答えただけなのに……。

それからというもののシグナムさんとの徒手戦闘は苦手としている。

「ふむ、慣れない徒手戦闘だからな。なにが起きても訓練中の事故で済むと思うが？」

あまり乗り気では無い僕にシグナムさんから追撃が入る。僕の心境がバレバレなのは恥ずかしいがシグナムさんがそこまで言うなら仕方ない。

うん、本当に仕方ない。日頃からシグナムさんにはお世話になつてるし、折角の誘いを断るのは失礼だ。

本当は嫌だけどシグナムさんが誘ってくれるんだから仕方ない。

「解りました、少しだけ手合わせ願います」

結局、これといった変わった事はなく、ただぼこられて、シグナムさんから説教を受けたとだけ言っておこう。

## 第八話（後書き）

付き合いの長い八神家はシズクの扱い方を知っています。

## 第九話（前書き）

そろそろシズクのプロフィール的なモノを作った方がいいんだろうか？

## 第九話

「ふむむ……」

シグナムさんとの訓練で少しだけ痛む身体を引きずりながらフォワードの皆と訓練に参加する為に訓練所を訪れた僕を待っていたのは申し訳なさそうなのはさんだった。

なんでも連絡を忘れていたそうだが、今日の午前中、フォワードの皆は六課の施設の説明を受ける為に訓練が無いらしい。

僕に訓練が無いという連絡をしていない事に気付いたなのはさんは慌てて訓練所に来たらしい。

本当にごめんなさいと言って頭を下げるのはさんを見て、逆に僕が申し訳ない気持ちになってしまう。通信を入れてくれれば済む様な話なのにわざわざ会って謝ってくれるとは律儀な人だ。

僕としても相棒のブレイドを整備に出しているので本格的な訓練に参加出来なかったと言って、なんとか頭を上げて貰った。

訓練が無くなり、いきなり時間があいてしまった僕がどうしたもんかと思っていたら、なのはさんがそれならそれでやっておいてほしい訓練があると言って、僕にちょっとした指示をすとなのはさんは行ってしまった。なんでもはやてさんと話があるとか。

まあ、教えてもらった訓練も自主練の範囲だったのでやってみたが思ったより難しかった。

まず適当にぐにやぐにやと曲がった線を地面に三本ほど描く。

後はデバイスのサポート無しで魔力変換資質を使って、炎を生み出して三つに分けるとそれぞれの線の先から先へ線をなぞりながら地面を焦がさない様に熱量を制御して同じタイミングでゴールさせると言う訓練だ。

言葉にすると簡単だけど実際にやってみると結構難しい。

線をなぞって、熱量を制御して、速度を調節する。

分割思考の訓練である事は理解出来たがこれが中々成功しない。

僕が分割思考が苦手という訳じゃない。むしろ、僕のような相手に近付いて戦うタイプは相手がどの様な動きをするのか、複数予想しなければならぬから下手をしたらちよっとしたミッド式魔導師より分割思考が得意だ。

それでも中々成功しない。

「ふむむ……」

何故、成功しないのか頭を捻る。

「訓練、頑張ってるね」

「えっ？」

そんな時、何となく聞き覚えのある声が聞こえてきて横を見るとフ

エイトさんの顔があった。

美しくきめ細やかで長い金髪、穏やかで優しさを感じさせるのと同じ時に意志の強さを秘めている瞳、そしてとても柔らかそうな唇。つまり超絶美女が僕の横にいた。それはもう僕が少し頑張れば口付け出来る様な位置に。

うん、知っていたけどここまで警戒が薄いのは女性としてどうなんだろうか？　むしろ、僕が男は皆、狼である事を教えた方がいいかもしれない。うん、そうしよう　　って。

「ぎゃああああああっ！」

悲鳴を上げて、無様に転げ回りながら逃げ出した、僕が。

僕はいったい何をしようとしていた！　フェイトさんが美人過ぎて会って長くも無く、そこまで親しくも無いのに男の欲望に負けてキスしようとしていた。女性特有のなんだか甘い匂いにやられて暴拳を犯す所だった。

とりあえず、ガツンと一発自分の頭を殴っておく。

フェイトさんは驚いた様子でキョトンとした表情を浮かべながら僕を見ている。

「ど、どうしたの？　大丈夫？」

「あ、大丈夫です。集中してたから少しだけ驚いちゃって……」

心配そうに問い掛けるフェイトさんにそれはこっちの台詞だ、と叫

びたい気持ちを抑えて答える。

あれだけ露骨に驚いておいて少し言い訳にしては苦しいかもしれない。

「そっか、それならいいんだけどね」

騙されたっ！ にっこりと笑ってくれる笑顔が眩しいけどフェイトさんって天然なのか！

「それにしても懐かしい訓練してるね、なのはに教えてもらったのかな？」

「？」

ニコニコと笑みを絶やさないフェイトさんは驚いた拍子に集中が解けて、少し焦げてしまった地面の線を見ると右手の人差し指をそちらに向ける。

「これぐらいかな？」

少し不安そうに呟いたフェイトさん。

次の瞬間、バチリと音を立てて電気が生まれて三本の線を通り、同時にゴールする。

「うん、衰えてないみたいだね」

少し嬉しそうなフェイトさん。

「あつ、もしかして」

「うん、この訓練を考えたのは小さい頃の私なんだ。魔力変換資質持ちは制御に気をつけないと危ないからね」

フエイトさんの言う通り、僕ら魔力変換資質持ちは魔法が混ざった熱いけど火傷しない炎も作れるけど、人を焼く事の出来る炎も簡単に作る事が出来る。それこそ呼吸するほど簡単に。

この訓練、分割思考じゃなくて魔力変換資質持ちの為の訓練なのか。ちよつと勘違いしていた。

「少し見させて貰ったけど上手くいってない様だし、ちよつとだけアドバイス。この訓練に必要な分割思考は戦闘用とはちよつと違うんだよ」

はて、やはり分割思考の訓練でもあるらしい。それにしても戦闘用では無い分割思考と言われても……。日常用？ 普通に話ながら別の事を考える事かな？

それにしても戦闘用と日常用の違いか……。

「あ……」

「ふふ、気付いた？」

少し考えたらパツと閃いた。

「目的が違うんですね？」

「うん、そつだよ」

僕の答えに頷くフェイトさん。

戦闘用　　と言つか僕が得意とする分割思考は相手を斬る為はどうするか。過程は分割思考によって違えど目的は結局、相手を斬るの一点に集中する。

それに比べて日常用　　この訓練で必要な分割思考は線をなぞる事、熱量を管理する事、炎の速度を制御する事、つまり目的がバラけている訳だ。

これはちよつと、フェイトさんにアドバイスを貰わなかったら気付かなかった。気付いても気付かなくてもいい様な小さな差ではあるけどいつかこの差が大きく分かれるかもしれない。

「こんな感じか？」

小さな差を意識しながら立ち上がって線に近付くと再チャレンジ。

「おお……、出来た」

所々、危ない所もあったけど初めて成功した。少し　ごめん、正直、すごく嬉しい。

「うん、いい感じだね」

自分の事の様に喜んでくれるフェイトさん。

うん、それ自体は恥ずかしいけど嬉しいがフェイトさんが言って

た小さい頃って、フェイトさんの年齢を踏まえたら本当に小さい頃の話だよな。

フェイトさんがそんな小さい頃に来ていた事を今の僕が四苦八苦しなからなんとか出来る状態。

なんというか正直、悔しい。

「えっと、気に障る事を言っただかな？」

そんな僕の雰囲気を感じ取ったのか、笑顔を曇らせ、心配そうな表情で尋ねるフェイトさん。

やばい、なんの罪も無いフェイトさんにあんな表情をさせたら僕の良心にかなりのダメージが。

変に誤魔化しても誤解を生みそうだから正直に答えよう。

「あの……、ちょっと悔しくて。フェイトさんが小さい頃に来てた事を今の僕が四苦八苦しってるって事に」

「そっか、負けず嫌いなんだね」

僕の正直な言葉に安心したのか、フェイトさんの表情に笑顔が戻った。本当に良かった、僕の良心的に。

それにしても負けず嫌いか……。ちょっと違うかな。

「僕は守りたいんです、フェイトさんを」

「えっ？」

何故か、フェイトさんが驚いて顔を赤く染める。多分、自分より弱い僕がフェイトさんを守りたいなんて大それた事を言ったから聞いているフェイトさんの方が恥ずかしいんだろう。

それでも僕は真剣だ。

「フェイトさんだけじゃない、師匠やシグナムさん、僕が守りたいと思う人全てを。今はまだ、肩を並べて戦える様になる事が目標だけど。いつか必ず、皆を守れるぐらい強くなりたいんです」

僕は聖王様じゃないから全ての人を守る事なんて出来ないかもしれない。だけど、目指しちゃいけないなんて事は無い筈だ。

綺麗事と笑われるかもしれない。それでも僕は守りたいんだ。悪いことをする人がいるなら必要以上に傷付けず、心をぶつけ合って善人の道へ。

そして多分、この選択は誰よりも強くなければならないと思うから。

「なのはが言ってた意味、ちょっと解ったかも……」

僕の言葉にホツとした表情を浮かべたフェイトさんが何かほつりと呟き、少しばかり呆れた様な視線を僕に向けてくる。

これは多分、そんな理想を掲げるならもつと特訓しろって呆れの視線だろう。

「アドバイス、ありがとうございました」

「うん、頑張つてね」

僕のお礼にフェイトさんが答える。話は終わりとばかりにフェイトさんは訓練所から去っていく。

さてと、訓練に集中するか。

フェイトがシズクに声を掛けたのは本当に偶然であり、ちょっとした必然でもあった。六課設立の日に顔を合わせて以来、フェイトとシズクには出会う接点が無かった。

元々、執務官として六課を空ける事が多いフェイトに夜勤部隊であるシズク、シズクがフォワードの皆と訓練をしていなければ全く関わり合いが無かったであろう。それでもフェイトは同室であるのはから話を聞いてシズクと話してみたいと思っていた。

そして偶然、フェイトは訓練所で座り込み、首を捻り何かに没頭しながら四苦八苦しているシズクの姿を見付けて声を掛けてみた。

悲鳴を上げて逃げ出した時にはちょっとショックを受けたけどわたしと慌てながら話すシズクの話聞いてすごい集中力だとフェイトは思った。

何をそんなに集中しているのかと視線を地面に向けるとフェイトはとても懐かしい気持ちを感じた。

自分が小さい頃に考えついた魔力変換資質のコントロールと分割思考を鍛える訓練、成長した今思うとあまり効果的な訓練では無い。勿論、慣れない人間がやると四苦八苦する程度には難易度があるのでそれなりのレベルまでは到達出来るがあくまでそれなりのレベルである。

シズクにアドバイスをして、シズクは納得した様だったけど分割思考の完成系は目的が一緒でもバラバラでも同じ様に分割思考が出来なければいけない。

それでもこの事は教えてあげるものではなく、本人が自分で自覚すべき事だ。

眉間に皺を寄せ、不機嫌な表情を浮かべたシズクに謝るとシズクは慌てて眉間に皺を寄せた理由を言った後、とんでもない事を言い出した。自分の顔が赤く染まっているであろう事は容易に想像出来た。

近い年頃の異性に真っ正面から守りたいと言われたのは初めてかもしれない。クロノやユーノは初めから守る者、肩を並べて共に戦う者として扱ってくれていたからそんな事は一度も言われなかった。

正直、ちょっと嬉しかった………が、続いて出てきたシズクの言葉でなのはが言っていたシズクは意外と女の子キラーかも知れないと言う意味を理解した。シズクと一番付き合いが長いはやても六課設立の日に逃げる様に去っていったシズクの話が出た時、そんな様な事を言っていた気がする。

皆を守りたい、それはとても素晴らしい目標だけどシズクは天然で異性が勘違いしそうな言葉を言う。

「あつ、忘れてた……」

そんな事を思いながら訓練所を後にしたフェイトはふとシズクに声を掛けた理由を思い出す。

お礼を言いたかったのだ。シズクがなりたい自分、将来のビジョンをフォワードの皆の前でなのはに相談した事、この事が良い流れを造っていた。

下官と上官、フォワードの皆となのはの間にあつた微妙な距離感、シズクがなのはに相談し、なのはがそれに真剣になつて答える。この事でフォワードの皆にはなのはが悩み事を相談出来る相手である事、自分の相談に真摯になつて一緒に考えてくれる事、少なくともフォワードの皆にとつてなのはがただの上官ではなく、悩み事が相談出来る上官であるという認識は小さいけれどとても良い変化だ。

なのはは指導力もある。フォワードの皆は上手く回っていくだろう。何となく振り返ると再び頭を抱えてうがーとなっているシズクの姿が見える。多分、失敗したんだろう。

クスリ、その時、フェイトは自分が自然に苦笑している事に気づき、その事に苦笑を浮かべる。

今度こそ隊舎へ向かい、訓練所を後にした。

## 第九話（後書き）

訓練の内容は完全に捏造です。修業した、キングクリムゾン、強くなった。これでは少し味気無いと思ったので。

シズクの信念が発覚、まあ、シズクくらいの年頃で力を持っている男の子なら一度は思い描く様な信念です。

## 第十話

整備が終わり、グリフィスさんからブレイドが手渡された翌日、平和な六課に警報が鳴り響き、フォワードの皆に初めての出撃命令が出た。

その時、既に寮にある自分の部屋で寝ていた僕は慌てて飛び起きると支度を済ませて六課に急いだ。

素早くて確な指示が飛び交うロングアーチを警護しながら僕はフォワードの皆が写し出されているモニターの向こうに僕がいない事のもどかしさを感じていた。

一緒に訓練をして切磋琢磨したフォワードの皆は下手をしたら命の危険さえある現場をひた走り、僕は六課の隊舎でロングアーチの皆さんの警護。

元々、戦力となる皆が抜けた六課やロングアーチを守る為に僕が六課にいる事は理解しているし、納得もしている。警護の仕事を軽視している訳でも無い。

それでも共に頑張り、共に汗を流したフォワードの皆の力になれない事に少しだけ寂しさを覚えた。

そしてモニターの向こう側にいるフォワードの皆はそれぞれ危機に立ち向かい、それを乗り越えていった。

スバルさんやティアナさんは元々、災害担当の所属だと聞いている。

初めて『敵』がいる実戦に出て緊張していたのか、何時もより動きが鈍い気がしたけど時間が経てば固さが抜けていつも通りの動きが出来ていた。

エリオ君とキャロちゃんは大金星と言っ言葉が相応しいだろう。エリオ君のガジェット新型撃破、キャロちゃんのフリード完全覚醒。正直、キャロちゃんのフリード完全覚醒は元々出来ているものだと思うのでキャロちゃんに対するはやてさんの激励に心の底で驚いたのは秘密である。思い返すと確かに訓練中、フリードの完全覚醒を見た覚えは無かった。

勿論、眠気なんて呑気なモノは完全に吹き飛んでいて、目的のロストログアを確保、ガジェットの殲滅を確認して警戒体制が解除されてから僕はヘリに乗って帰ってきたフォワードの皆に一言、「おつかれさま」と言って出迎えた。

それ以上の言葉は要らない、むしろ意味が無い。命懸けの実戦とはそれほど人を興奮させる。自分でも気付かない内に。僕もそうだった。実戦に慣れた今でも聖王教会から手配された悪人を捕まえた後は一日ぐらい性格が攻撃的になっている。その度にシャツ八師匠が冷静になれと頭をぶん殴ってくれるので元に戻る。犬のしつけみたいなモノだけ一応、僕はそれで冷静になれる。それでも流石にフォワードの皆はそこまで余裕は無いだろう。

だから、日常の入口でもある簡単な挨拶、それだけでいい。

「おつかれさまです」

フォワードの皆から返ってきた言葉はそれだけで皆ふらふらしながら六課の隊舎に入っっていく。

やっぱり皆、疲れているようだった。

「あつ、ヴォイスさんもおつかれさまです」

フォワードの皆が隊舎に戻っていくのを見届けた後、ゆっくりとヘリから降りてくるヘリパイロットのヴォイスさんにも挨拶をする。

ヴォイスさんとは食堂で知り合った。特に深い知人も居らず、グリフィスさんも事務処理と一緒に食事が出来なかった時、一人でテーブルを占拠するのも気まずいと思って唸っていたら一緒に飯を食べようと誘われたのだ。それから必然ともいえる六課の男女比率に押されて会う度に話をする様になって、それなりに仲良くなった。

「おう、おつかれさん」

ヴォイスさんはほがらかな笑みを浮かべて、片手を拳げながらこちらに歩いてくる。

「お前さんもモニターであいつらの働きを見てたんだろ？ 見てるこっちがハラハラする様な奴らだけであいつらなら大丈夫さ、お前さんもそう心配すんな」

「そう……ですね」

ヴォイスさんの言葉に少し驚きながら頷く。考えている事を顔に出した覚えは無かったんだけどな。

ヴォイスさんは普段、気の良い年上の男性だけど今回の様に恐ろしい程の洞察力を見せたり、戦場に出る人間特有の冷めた瞳を浮かべ

る事のあるよく解らない人でもある。勿論、人間なのだから知り合  
って少ししか経っていない僕に全てを理解する事なんて出来ないの  
だけれど。

「ちよつと微妙な時間だけど飯にしねえか？」

「はい、そうしましょうか」

ヴォイスさんの言葉に僕は即答する。

グリフィスさんは真面目だし、エリオ君はまだ子供だ、ヴォイスさ  
んが一番相談しやすい。

さて、今日は六課女性陣の無防備さについて深く語ろうかな。

第十話（後書き）

シズクはいつ、戦場に出るんだろうか。

## 第十一話

フォワードの皆が初出勤してから数日後、フォワードの皆が受ける訓練もチーム戦を想定した連携プレイから個別スキルを鍛える訓練に移行されて既に個別スキルの訓練をしていた僕もフォワードの皆が受ける訓練に混ざれる様になった。

そうは言ってもティアナさんやキャロちゃんと一緒に訓練は受けた事が無い、器用貧乏万能化と言ってもミッド式の訓練やバックアップの訓練を受けてもあんまり意味は無いからだ。もっぱら、エリオ君と一緒にシグナムさんに挑んだり、スバルさんと一緒にシールドを展開してヴィータさんにシールドをぶち抜かれる日々である。防御系に関してはザフィーラさんに教わるつもりだったのだけれど諦めた。物事には順序がある。一般的な防御系がまだ苦手な僕がザフィーラさんクラスが扱う防御系の魔法を使いこなせるとは思わないからだ。

それでもこう今までと違い、本当の意味で一緒に訓練を受けている事が少し嬉しい。勿論、今でもあるチーム戦の訓練には参加しない。本来、フォワードの皆と僕が同じ戦場に出る様な事は無いからだ。あるはずの無い戦力をチームの連携プレイに入れる訳にはいかない。もし、同じ戦場に出る機会があれば僕は一つの戦力として戦う事になるだろう。

「ブレイド、シールド展開っ！」

そんな事を頭の隅で考えながら僕は目の前で真っ正面から突っ込んで来るスバルさんの攻撃を受け止める為に正面にシールドを展開して真っ正面からスバルさんの攻撃を受け止める。

「ぐっ！」

「くっ、もつちよっと……」

真つ正面からの攻撃を受け止めた僕と攻撃を叩き込んだスバルさんの二人は互いに呻き声を上げる。僕は叩き込まれた攻撃の衝撃で壊れそうなシールドを見て、スバルさんは勢いを無くし受け止められた自分の攻撃に対してだ。

訓練の初期段階で僕とスバルさんは二人ともシールドを展開して、簡単にヴィータさんがぶち抜くという訓練になるかならないかよく解らない訓練をしていたのだが、その内ヴィータさんから二人で互いを殴って守っての訓練を試してみろと言われた。

これだけは断言しておくが総合的な能力ではスバルさんより僕の方が強い、それでも一撃の重さや防御スキルに関しては似たり寄ったりだ。一撃の重さはスバルさんの強味だし、防御スキルの低さは僕の弱点だ。

これが中々良い具合の力関係でかなり拮抗している。ヴィータさんの見立てが合っていた訳だ。今の所は僕が意地を見せて全ての攻撃を受け止めきっているし、全てのシールドを破壊している。それでも本当にギリギリのラインで僕が優位に立っているけど、あと少しで僕に勝てる事をスバルさんも自覚している。だから、スバルさんはあと少しの力を捻り出すし、僕も意地になって力を出す。

このサイクルを繰り返す結果、互いに全力を振り絞るのだから本当に少しずつだけ成長している。

「ふう、どうする？　すぐに交代する？」

「はい、お願いしますっ！」

なんとかスバルさんの攻撃を受け止めて、せえせえ言っている僕が僕と同じ様に疲れた表情を浮かべて悔しがっているスバルさんに声をかけるとスバルさんは元気良く返事をする。

攻守交代である。ヴィータさんは何も言わずに僕達を見守っているから訓練を止める様なオーバーペースで訳では無いんだろう。

ぐぬぬ……、今度こそ受け止めると張り切っているスバルさんを見て、僕も負けられないと気合いを入れる。

「それじゃあ行くよ」

「はい、解りました」

互いにへろへろの状態だけどスバルさんの返事を聞いて僕は一瞬だけ瞳を閉じて、呼吸を整えたと心を鎮める。

瞳を開いた目の前にいるのは仲間では無く、打ち倒すべき敵である。

「はあっ！」

息を吐き出し、全身を使ってブレイドを振り下ろす。

ただ重いだけの一撃じゃない、ただ速いだけの一撃じゃない、速くて重い発揮出来る最高の一撃を　。

振り下ろされたブレイドがスバルさんの展開したシールドとぶつかり火花を散らす。

「」

「」

互いに無言、スバルさんと合う視線、その瞳の奥に宿る負けないという意志。僕だって、絶対に負けない。

ミシリとシールドに輝が入る、スバルさんはシールド展開に集中して、僕はブレイドに力を込める。

そしてパリンと砕けるシールド。

そして僕は躊躇わずスバルさんの身体にブレイドを叩き込む。

「わっ！」

ブレイドを叩き込んだ衝撃で吹き飛んで地面を転がるスバルさんを見届けてから深呼吸して呼吸を整える。

訓練なのだから手加減しない、シールドを破られた方が悪い。本当は初めてシールドを破壊した時、スバルさんに当たる寸前でブレイドを止めたらヴィータさんに凄い剣幕で怒られたのだ。そのちょっとした気遣いが実戦でスバルが大怪我をする元になると、実戦でシールドが破壊される意味を身体で覚えると。その時のヴィータさんが少し怖かったのは秘密だ。

「大丈夫か、スバル？」

「うん、大丈夫だよ。私、人より頑丈だから」

訓練服のいたる所が汚れてしまったスバルさんに近付くと手を差し延べてニツコリと笑みを浮かべるスバルさんの身体を起こすの手伝う。

スバルさんの事をスバルと呼び捨てにしたがこの前みたいな失敗では無く、訓練を一緒にしていたら呼び捨てで構わないと言ってくれた。

心の中では最低限の礼儀として敬称を付けているが実際に呼ぶ時は呼び捨てだ。実は孤児院の家族以外で同年代の異性を呼び捨てにするのは初めてである。

立ち上がったスバルさんを見て、怪我らしい怪我をしていない事に安心する。

スバルさんが頑丈なのは知っている。それでもやっぱり心配は心配だ。

「それでもだよ、スバルは身体が強いかもしれないけどその前に女の子なんだから、怪我でもしたらって思うのは当たり前だろ」

「えっ、あっ、その……」

僕の呆れた視線にスバルさんはほんのりと顔を赤くして視線を逸らす。

ほら、顔に土が付いてるじゃないか。スバルさん、普段は普通に可

愛い女の子なんだからそういう事を気にしないボーイッシュな所は  
ちよつと反応に困る。女の子として自分がどれだけ魅力的なのか、  
自覚を持って欲しいものだ。

「あー、もう時間だし、今日の訓練は終わりだ。スバル、お前午後  
もあるんだから早くシャワー浴びてこい」

何故か、ヴィータさんから浴びせられる呆れた視線。そしてヴィー  
タさんの言葉に頷いて逃げる様に去っていくスバルさん。

「うーん、やっぱりシャワーを早く浴びたいって所は女の子なんだ  
な」

スバルさんが女の子としての自覚が無い訳では無い事が解った僕が  
うんうんと頷いているとヴィータさんが盛大に溜め息を吐く。

「アタシが思うにシズク、おめえはいつペン女に刺された方がいい  
んじゃないねえか」

なんでさっ！

## 第十一話（後書き）

シズクは男女の機微に鈍い訳ではありませんが美人とかの褒め言葉を  
使わない限り、女性が照れないと思っっている唐変木です。

## 第十二話

フォワードの皆と一緒に訓練を済ませた僕になのはさんからはやて部隊長が僕に用があるとの伝言を伝えられた。

急ぎの用件では無かった様なのでエリオ君と一緒にシャワーを浴びて汗を流した後、水分補給にスポーツドリンクをがぶ飲みしてから心のなかで悪いと思いながら僕に合わせてシャワー室を出た為に待ち惚けになってしまったエリオ君を置いてはやてさんが待つ部隊長室を訪れた。

「シズク・ローウェルです、失礼します」

「ああ、お疲れ様。もう少し待つてな」

ノックを済ませて部屋へ入るとデスクワークをしていたのか、チャリと僕に視線を外した後、再びモニターに視線を移すはやてさん。

はやてさんの手は淀む事無く、キーボードを叩いている。正直、僕にとって真面目な顔をして仕事をするはやてさんは新鮮な気がする。

はやてさんとは本当に互いが子供の頃からの付き合いなのではやてさんを姉と呼ぶ事に余り違和感はない。実力はともかく魔法歴だけなら僕の方が上だ。

それでもはやてさんが聖王教会を訪れる度に初めて会った時の弱々しい印象から性格が歪んでいって、今の悪戯好きでも相手も本気で嫌がる事はしない厄介な性格になっていったプライベートの過程は見てきたが仕事モードのはやてさんを見た事は無かった。

「ん？　なんか失礼な事考えてへんか？」

「考えて無いですよ」

お前は何処のエスパーだ。心の中で突っ込みながら表情には決して出したりしない。性格が歪んでるとか思っていた事がばれたら大変な事になる。

はやてさんは付き合いが長いので僕の好みを熟知している節がある。シヤマルさんやシグナムさんの何気ない仕草に鼻を伸ばしている所を何度も見られているし、はやてさん自身も僕の守備範囲に入っている事を自覚している。ヴィータさんはまあ、ちよつとアレだ。

実は僕に気があるんじゃないかと勘違いする様な悪戯も何度か受けた。役得ではあるので止めてくれとは言わないけど。

「まあ、ええか。これで終わりつと」

キーボードを叩き終えたはやてさんは確認を済ませるとモニターを消す。

「待たせてごめんな、それでシズク君を呼んだ訳なんやけど聖王教会からロストロギアの回収依頼が来てな。厄介な事にそのロストロギアがある場所が管理外世界なんや」

「それはまた……」

かなりマズイ状況じゃあないんでしょうか？

ロストロギアとは簡単に言ってしまうえばオーバーテクノロジーの塊である。人が手を出してはならぬ領域に存在する技術、滅んだ世界に存在する使い方が解らない技術などロストロギアと呼ばれる物にも本当に危険な物からただ扱い方が解らない為にロストロギア扱いにしている物まで危険度で言えば様々だ。

ただここで問題なのは管理局が既にロストロギア認定をしている技術が管理外世界に存在する事だ。

元々、管理外世界にもロストロギア認定に値する技術は数多く存在する。だが、その世界で技術が正しく回る限り管理局も介入しない。ロストロギア認定に値するからと言って介入ばかりすればそれは世界の守護者では無い、自己満足な正義を振りかざす略奪者に過ぎない。

だが、既にロストロギア認定を受けた技術が管理外世界にある。もし現地の人間が回収し、技術を解析してしまったらその世界には良くも悪くも技術革命が起きてしまう。

その世界の中で起きた技術革命なら問題は無い、外の世界からもたらされた技術によって起きる技術革命だけは管理局としても絶対に防がなくてはならない事だ。

「危険度自体はそう高くないし、任務としてはそう難しくはないねん。問題は存在が確認された世界の文化水準が魔法文化が無いだけで後はほぼミッドと同等な所や」

それはますます大変な事では？

どの世界でも人の探究心というのはとんでもない事をしでかす。

「それで確認された世界って言うのは？」

「それがなんの因果か第97番管理外世界『地球』。つまり私ら隊長陣の出身世界や。危険度は低いと言っても相手はロストロギアや、万全の体制で挑む為にフォワード陣全員を連れていくつもりや、シズク君はどうする？」

ああ、だから真剣なのか。いや、これでは他の世界ならどうでもいと取れる誤解する様な言い方だけだ。

フォワード陣全員って事はシグナムさんもないのか、どうするもこうするも決まってるだろう。

「解りました、皆さんが留守の間はお任せ下さい」

こういう時の為に僕が　僕達、夜勤部隊がいる。

「そっか、残念やな。ロストロギア相手やから戦力は多い方が良くないと思ったんやけど」

「ここで僕がホイホイ着いていたら僕が六課にいる意味が無いじゃないですか……」

真剣な話は終わりとばかりにニヤリと笑うはやてさん。

なんだか嫌な予感がする。

「『地球』、特にロストロギアが確認された日本って場所は私らの出身国でもあってな、日本の文化には『混浴』って言って男女が一

緒に入るお風呂があつてな」

畏だと解っていないがらはやてさんの言葉にピクリと耳を傾けてしま  
う。

な、なんと男女が一緒にお風呂に入る文化だと……。

日本の『混浴』……なんていう文化だ。

そんな話を聞かされたら僕の理性スイッチなど簡単に吹き飛ぶ。

なのはさんを始めとした隊長陣、スバルさん達新人二人組、数人は  
サポートに行くであろうロングアーチ陣。

現地の文化なのだから従わなければならぬと嫌だけど仕方ないの  
で産まれたままの格好で皆さんと一緒にいるお風呂。

僕はそこまで考えてゴクリと生唾を飲み込み、拳を握る。

な、なんて勝ち組。

「ど、ど、どどどどうしてもと言うなら僕も着いていきますけど？」

「やっぱりシズク君はスケベやな」

吃る僕にはやてさんは爆笑している。

畜生、男の子の純情を弄びやがって！

「はやて部長長達の留守はしっかり守るのでご安心を……」

爆笑しているはやてさんにそう言って頭を下げる。

煩惱退散、煩惱退散っと！

## 第十二話（後書き）

シズクは留守番です。聖王教会からの依頼だとしてもシズクには六課での仕事がありますから。ロストログア関連については捏造です。確か次元震クラスの事故になれば介入するみたいな感じだった覚えが……。

そうか、エリオは勝ち組だったのか……。

## 第十三話

「うむむ……」

何も無いのに唸ってしまう程、暇である。結局、本当に皆の出張任務から置いてきぼりを喰らった僕は夜勤部隊の中で日中に担当するメンバーと夜に担当するメンバーの二つに分かれたのだが、見事に日中を担当するメンバーに選ばれた。

やはり夜勤部隊の人達もせっかく慣れてきた生活リズムを崩すのは嫌らしい。僕が選ばれた理由は若いから体力があるだろうって理由だ。

ぶつ通しの勤務なので非常に眠たいが周りの人達が働いている横で僕が寝る訳にはいかないだろう。何か仕事でもあれば少しは集中出来て眠気も覚めるんだろうけど生憎、僕がするべきデスクワークは終わっている。寝不足の状態で訓練する程、馬鹿でも無い。

本当に暇である。

今までは気付かなかったんだけど僕の机が用意された場所は日中、日当たりが良い。太陽の暖かい光に包まれてうつつらうつつらと船を漕いでしまう。

「あつ、シズクさんもコーヒー要りますか？」

「はっ、よろしくお願いします」

半ば夢の中へ誘われていた僕にかけられた声にビクリと反応して答

える。僕にコーヒーを要るかと尋ねてきたルキノさんは僕の態度に苦笑している。

うむ、はやてさん達が帰ってくるまで日中が担当になった事で良かったと思える事はやはりルキノさんやアルトさんなど僕と同年代で可愛い女性陣と知り合えた事だろう。

今までも警護中に顔を会わせて会釈ぐらいはしたことあるが自己紹介をして話すのは今回が初めてだ。

可愛いし、是非お近づきになりたいもんだ。同年代の異性との話し方なんて全く知らないけど。

それにヴォイスさんから聞いた話ではルキノさんにはグリフィスさんがいるとか言っていた気がする。その前はシャーリーさんとグリフィスさんが幼馴染みだとか言っていた。

ヴォイスさんの話はころころ状況が変化するので余り信憑性にかけるが僕が暇過ぎて人間観察をする限り、その的外れな訳でもなさそうだ。

そうか、やはりグリフィスさんは敵だったのか。モテる男は全て敵だ。モテない男のひがみパワーを受けるがいい。特に何もする事は無いけれど。

「はい、お待たせしました」

「ありがとうございます」

そんな事を考えながらポケットとしている内にルキノさんがコーヒー

を入れてきてくれたのでお礼を言ってコップを受け取る。

うん、苦味があって香ばしい。酸味が強いタイプじゃなくて僕が好きな香味が強いタイプのコーヒーだ。

そうして僕はコップに注がれたコーヒーをちびちびと味わいながら  
迫り来る眠気と戦っていた。

結局、グリフィスさんに業務は終わりましたよと肩を叩いて起こされたけど。もう少しアルトさんやルキノさんと話しておくんだった。

### 第十三話（後書き）

うん、シズクは間違ってもクロノやユーノみたいにモテるタイプでは無いと思うんだ。どう考えたってスケベ丸出しの所はマイナスだし。イメージで言えばとらハ3の恭也みたいに付き合ってから良さが解るタイプです。赤星の様なモテモテタイプでは無いです。

## 第十四話

出張任務から無事に帰ってきた皆が通常の勤務に戻り、僕も再び夜勤部隊へ戻ってから数日後、僕は再びなのはさんを通じてはやてさんから呼び出された。結構、大事な話があるらしい。

「失礼します」

「ええよ、入って」

ノックを済ませ返事を確認すると部隊長室へ入る。

そこには真面目な顔をして座っているはやてさんとその横でふわふわと浮いているラインが居た。

「お疲れ様、さっそくで悪いんやけど話してええか？」

「はい、大丈夫です」

「ライン、よろしく」

「了解です」

僕が部屋に入ってきた事を確認したはやてさんは僕の方を見てから僕に確認を取るとラインに指示を出して、ラインが手元にあるキーボードを操作して僕の前にモニターを表示させる。

そのモニターには森に囲まれた一つの建物が映し出されていた。外装的にホテルか何かだろうか？

「え〜と、この建物は？」

見覚えは無いのでこの映像を僕に見せて何が言いたいんだろう。

「ここはホテル・アグスタ、次の護衛任務の場所でシズク君にも現場に出て貰おうと思っとる場所や」

「いや、それは……」

実践に出るのが嫌な訳じゃない、怖いと思う気持ちは忘れてはならないけどガジェットに対する訓練は十分に積んできたつもりだ。きちんと働ける自信はある。

しかし、何故このタイミングで？

非常時以外で僕がホイホイとフォワードの皆と一緒に戦う様な事態は管理体制の中で大きな問題となる筈だ。非常時なら融通が利くだろう。だけど、今回の様な通常時に僕が現場に出て働く事を認めたら管理体制が目茶苦茶になってしまう可能性もある。

「ああ、書類関係は大丈夫や。きちんと大丈夫の様に処理したし、カリムを通して聖王教会からも了解を得たから」

流石はやてさん、僕が思い付く様な杞憂は既に処理済みである。

「僕に対ガジェットの实战経験を積ませておきたいって所ですか？」

わざわざ余分な書類仕事を増やしてまで僕を現場に出す。考えられるのはこれくらいだ。訓練を積んだと言っても結局は訓練、実戦に

慣れるにはやっぱり実戦をこなすしかない。

「うん、その通りや。もう一つ、理由はあるんやけどね」

そう言うてはやてさんはリインに視線を送るとリインはこくりと頷いて再びキーボードを操作する。

すると、ホテル・アグスタが映し出されていた映像から紫色の髪をした白衣を纏っている男性の映像に入れ替わる。

「この男の名前はジェイル・スカリエッティ。難しい話は省くけど広域次元犯罪者でガジェットの製作者や。目的はわからんけどわざわざ破壊したガジェットの中にネームプレートがあった。ガジェットがなんでレリックを集めるかはまだわかつたらんけど今回、ホテル・アグスタで行われるオークションにレリックと似た性質を持つ物があつてそれをレリックと誤認したガジェットの殲滅とオークションに参加した民間人の保護が今回の任務や。今まで正体を隠してレリックを集めていた本人がわざわざ自分から正体を明かす。今度からはもつと大段的にレリック集めをしてくる筈だから今の内に対ガジェットの实戦をさせておきたいと思つてな」

ジェイル・スカリエッティ　今まで聞いた事の無い名前だけれどわざわざ自分から正体をばらしたんだから彼なりにレリックを集め切る確信を持つたんだろう。

管理局でも有名なエースが何人も居る六課相手に正体をばらして挑発。六課に匹敵する戦力、もしくはそれに準ずる切り札がナニカ。

間違いなく、一筋縄でいく相手では無い。

「解りました、シズク・ローウエル。ホテル・アグスタの警護任務、参加させていただきます」

「うん、よろしくな」

「それでは失礼します」

僕の力が皆の役に立てるならこれ程嬉しい事は無い。はやてさんもわざわざ書類仕事を増やしてまで僕に実戦を経験させようとしてくれたんだ、断る理由は何処にも無い。

敬礼をして頭を下げるとそのまま部隊長室を去る。

既にも実戦を経験しているスバルさんやティアナさんに話を聞いてイメージだけでも実戦に近付けておこう。

そう決意して、僕は今一番欲している睡眠を取る為に自分の部屋に向かって歩き出した。

## 第十四話（後書き）

うん、少し御都合的過ぎると思いますがこれでホテル・アグスタ参戦は納得して貰えたら。

## 第十五話

はやてさんに頼まれたホテル・アグスタの警護任務当日、ある程度の自由行動が認められている戦力として担当する警戒区域を任せられた僕は空の上から眼前に広がる森に異常が無いか、ゆっくりと飛びながらパトロールをするとロングアーチへ通信を繋ぐ。

『ロングアーチへ報告。こちらシズク・ローウェル、担当区域は今の所異常ありません』

『解りました、引き続き警戒をお願いします』

『了解しました』

ふう、と溜め息を吐いて定期連絡を終える。任務中なのだから堅苦しいきちんとした話し方での報告だがどうにも息苦しい。イケないイケない、教会騎士団の中では常にこんな話し方だったのだ、比較的そういう事に緩い六課の空気に馴染み過ぎた。

パトロールを終えた僕はそのまま地上に降りると周囲に生えている木々を見て、深く深呼吸をする。

リラックスしながらも程よい緊張感を保っている。

僕が任された担当区域はヴィータさんやシグナムさん達が担当しているホテルの広域とフォワードの皆が担当しているホテル周辺の間にある区域だ。役割としてはヴィータさん達が破壊しそこねたガジエットの殲滅、フォワードの皆がいる所に行かない様にする事だ。

対ガジェット戦は初めてになるけど責任は中々重い。皆の事を信用していない訳では無いけどもし僕がドジを踏めばガジェットはそのまま皆の所へ行ってしまう。戦いが激しくなれば一体や二体は通すかもしれないがヴィータさん達副隊長陣と僕でガジェットを殲滅して、フオワードの皆は保険程度に考えておかないといけない。

これは自信や慢心では無く、皆より強い騎士としての義務だ。皆が充分以上に戦える事は知っているけどヴィータさん達と僕で止められるならそれに越した事は無い。

『ロングアーチから六課局員へ連絡、ホテル・アグスタの中でオークションが始まりました。引き続き警戒を　　ッ！　動体反応確認、ガジェットですッ！　？型が16体、？型が3体、それより後方から？型が10体！』

ロングアーチのルキノさんからガジェット確認の報告を受けるのと同時に通信を繋げたモニターからガジェットの現在地が表示される。

『おいつ、シズク！　聞こえてるか！』

『はい、聞こえています！』

六課共通の念話通信でヴィータさんから連絡が入る。

『？型はシグナム、？型はアタシが相手をするが少し広域に広がり過ぎてる。数体はお前の方に行かせるぞ！』

『解りました！』

ヴィータさんの指示に返事をして僕は心を高ぶらせ、精神を集中さ

せていく。

モニターに映し出されているレーダーには既に交戦が始まったのか、ヴィータさんとシグナムさん達がガジェットと接触して次々とガジェットのマークを消し去っている。やはり実戦になるとヴィータさん達は鬼のように強い。

そう思い、僕はブレイドを強く握り締める。

「行くぞ、ブレイド」

僕の視線は既に3体の編隊を組んでいるガジェット？型を捉えている。

呼吸を止めて、真っ正面からガジェットへ突っ込む。3体のガジェットから来る迎撃を必要最低限の動きで避けて、シールドで受け止め受け流し、間合いを詰めてブレイドを振りかぶる。

「ふっ！」

瞬間、ぐらりと力が抜ける様な気がしたが気にせずそのまま一体目のガジェットに振り下ろし、返す刃で2体目にブレイドを叩き込む。

これで2体目、大丈夫だ。僕はAMFの中でも充分に戦える。

それを確認すると僕に狙いを定めている最後の1体から距離を離して攻撃をシールドで受け止める。

「いけ！」

僕の周りに数発の炎弾を作り出すと最後のガジェットに向けて放つ。バリバリと音を立ててぶつかり合う炎弾とAMF、少しだけ動きを止めるガジェット？型。

そして僕はその隙を見逃さない。

地面を蹴り上げ、距離を詰めるのと同時にブレイドを横に一閃。確かな手応えと共にその場から離れる。

ガジェットの撃破を確認。

『そちらにガジェット？型5体行きます！』

『了解！』

ルキノさんの報告に返事をする。

さあ、集中していけ、思考を巡らせる。心を高ぶらせ、闘志を胸に。戦いはまだ始まったばかりだ。

## 第十五話（後書き）

シズクの初実戦開始です。

## 第十六話

「これで13体目ッ！」

ブレイドを叩き込み、ガジェット？型が沈黙した事を確認すると一息入れる。

ヴィータさんは僕にも数体任せると言っていたが想像していたよりもずっと少ない数しか相手をしていない。念のためにずっと映し出しているモニターのリーダーにはヴィータさんやシグナムさん達、副隊長陣が鬼神のごとき働きでガジェットを殲滅している。

破壊しそこねたガジェットは僕が今のところ全て破壊しているのでフォワードの皆が待機しているホテル周辺には近付けていない。

僕も対ガジェット戦闘に慣れてきた事だし、良いペースだ。不確定要素が存在しなければフォワードの皆が危ない目に遭う事も無く、護りきれる。

『ガジェット？型2体、来ます！』

『了解！』

ルキノさんからの通信に返事を済ませ、額に滲ませた汗を拭くとリーダーに視線を向けてガジェットがどの方角から来るか確認する。

真っ正面だ。

2体のガジェットを目視で確認した僕をブレイドを握り締めると飛

び上がって不規則な軌道でガジェットと距離を詰める。

「はあっ！」

飛行魔法がAMFによって掻き消されるのと同時に1体目のガジェットに向けてブレイドを振り下ろす。

確かな手応えと共に返す刃で2体目へ。

「　　つて、待てっ！」

てつきり僕に向けて狙いを定めていると思っていたもう1体のガジェット？型は僕に目もくれずホテル・アグスタへ向かっていく。

僕は慌ててティアナさんからアドバイスを貰った二重被膜の炎弾を数発作り出すと僕を無視したガジェットに向けて叩き込む。ティアナさん程の技術は無いのでガジェット？型を破壊する事は出来なかったが動きを止める事が出来た、それで充分だ。

「ふっ！」

僅かに感じる違和感の正体を見抜けないまま足止めしたガジェット？型を破壊する。

何かが変だ、僕を優先的に排除しようとしていたガジェットの動きとは明らかに違うある『目的』を達成させる為だけの動き。それに若干ガジェットの動きが良くなった気がする。

チラリと向けたモニターのレーダーでもヴィータさん達のガジェット破壊ペースが目に見えて落ちている。

さっきまでと何かが違う。

そんな理屈では無い感覚で確信を得た僕はロングアーチへ何が起きているのか把握出来ているか確認する為に通信を繋げようとする。

『緊急連絡！ ロングアーチから各員へ！ ガジエットの集団が転移系魔法にてホテル周辺に出現！ フォワードメンバー及び他局員がガジエットと交戦を開始！』

「っ！」

ロングアーチからの緊急連絡に小さく舌打ちしてすぐさまフォワードの皆が居る筈の方角に向けて飛び立とうとする。

次の瞬間、僕を取り囲む様にして複数の魔法陣が浮かび上がり、その中からガジエットの集団が出現する。

？型が13体に？型が2体。

「くそっ！」

これはマズイ、足止めだけじゃない。僕は1対1の戦闘は得意だが今の様な1対複数の戦闘は苦手としている。負けるとは思わない、時間をかけて相手をすれば充分相手出来る。でもその場合、フォワードの皆を助けに行く事は出来ない。

仕方がない、フォワードの皆を信じよう。少し無茶をすればすぐに殲滅出来るかもしれないが今は無茶も無理もする様な場面じゃない。確実に相手を片付ける事が優先だ。

流暢に相手の体勢が整うのを黙って見ているつもりも無い。

呼吸を整え、魔力をブレイドへ送る。

「カードリッジロード！」

僕の命令に応えて解放されるカードリッジに込められた魔力をそのまま発動させようとしている魔法の力にする。

本来なら僕の技量では扱いが難しいがここは魔力に任せて発動させる。

「捕らえる、鋼の軛！」

本来ならザフィーラさんが得意とする捕獲系ケージタイプ魔法だ。だが、今回の警護任務に参加しているザフィーラのように発動させるタイミングで少しだけ攻撃性を含めればガジェットに対して十分な攻撃魔法となる。デバイスのサポートを受けてなんとか発動させる僕とデバイスも使わずに発動させるザフィーラさん、力の差は歴然としている。

地面から突き出された白銀の結晶は5体程のガジェット？型を捕らえてそのまま破壊する。

良い幸先だ、これ以外で複数の相手を攻撃する魔法を僕はまだ実戦レベルで習得していない。咄嗟に作り出した二重被膜の炎弾も既にAMFに止められる事は確認している。

後は1体ずつ破壊していくのみ。

「炎熱加速！」

ブレイドに炎を纏わせて身体能力も強化させる。無茶をする場面では無いが出し惜しみする場面でも無い。先ずは大物のガジェット？型を全力で潰す。

## 第十六話（後書き）

もうちょっとだけ続きます。

## 第十七話

「これで最後っ！」

その掛け声と共にブレイドを一閃、最後に残ったガジェット？型の破壊を確認した僕は周囲の安全を確認するとブレイドを鞘へしまう。時間とリーダーを確認すると既に20分は経っており、フォワードの皆の所には僕がフォローに行くまでもなく、ヴィータさんが既に駆け付けていて戦況を巻き返しつつある。

やはり結構時間がかかってしまった。援軍が来なかったのは信頼と思っでいいんだろうか。まあ、戦力としてここにいる以上、主力メンバーの足を引っ張る事が無くて本当に良かった。

流石にガジェットの集団に囲まれて大立ち回りする程の実力と自信は無かったので僕が選んだ戦術は移動しながら1体ずつ破壊していく事だった。僕が対応出来る、2体もしくは3体になるまで相手のガジェットを引き離すのに時間がかかってしまったが結果的に僕の被害は一切無いので選択としては間違っていなかった筈だ。

『ロングアーチへ連絡、こちらシズク・ローウェル。ガジェットの集団殲滅完了、こちらの被害は無し。次の指示をお願いします』

『お疲れ様です、ガジェットの集団は既に散発的になっています。ホテル・アグスタ周辺にはヴィータ副隊長及びフォワードメンバーが待機しています。シグナム副隊長達とガジェットの遊撃をお願いします』

『了解しました』

ロングアーチへ連絡を入れた僕はレーダーを横目に空へ飛び上がる。一度は劣勢に立たされたが流石と言った所か、既に全体的な戦況も巻き返している。

追加の転移系魔法が無い所を見ると敵も手打ちと言った所だろうか。空から見て、目に見える範囲で既に戦闘は行われていない。木々に覆い隠されている事もあるがガジェット自体もうそんなに多くは存在しないのだろう。

ガジェットの遊撃に出る時にはレーダーだけでは無く、目視でも木々の隙間を注意して確認した方が良いかも知れない。

なのはさんが持つレイジングハートの様なインテリジェントデバイスなら誘導弾なり、なんなりで索敵範囲を広げる事が出来るが僕はレーダーと目視だけが頼りだ。ロングアーチの実力を疑う訳では無いがジャミングを受けている可能性だってある。警戒するに越した事は無い。戦場では勇猛であるのと同時に臆病ぐらいで丁度良い。

僕はレーダーと目視で木々の隙間を確認しながら動き出す。上空から見下ろす木々の隙間には特に問題は見当たらない。木によって影になっている場所や茶色の地面と勘違いしそうな色の外套を纏った人が立っているくらいだ。

「　　って、ひとつ！」

自分の中で何気なく消化しようとしていた考え事の中に見過ごせない物が存在した事に気付いて慌てて移動を中止する。

「なんでこんな場所に……」

小さくぼやきながら来たルートを逆走する。正直、悪態をつきたくなる様な事態であるが民間人の保護は最優先で行わなければならぬ。それが例え僕の遊撃が遅れたせいでシグナムさん達が怪我をしようがなんであろうと。

人を見かけた筈の場所に着くと地上へ降りる。

「管理局です、ただいまこの地域は戦闘区域に指定されています。誘導しますので僕についてきて　　って、あれ？」

確かに人が居た筈の場所には誰もいない。周囲を見渡して人の気配を探しても全く見付からない。

見間違いだったのか？

それにしたって見間違えるモノがある筈だけど周囲には人と間違える様なモノも無い。

『どうかしましたか？』

『いえ、なんでもありません！』

ロングアーチからの通信にハツとなって答える。確かに気になるけど周囲に人の気配が無いのだから何かの間違いだろう。今はそんな事で頭を捻らせている場合じゃない。

「行こうか、ブレイド」

物言わぬ相棒に声をかけて僕はシグナムさん達の援護に急いだ。

「行ったか……」

シズクが飛び去っていくのを見届けた男性は気配を消して隠れていた木々の間から姿を現す。自分自身が為すべき事を為すまでは人前に出る事はあまりしない方がいいだろう。特に管理局員の前には。

「まだまだ荒削りで若いが良い騎士だ」

男性はシズクの足止めとして召喚されたガジェット集団とシズクの戦闘を隠れて見ていたがそれが正直な感想だった。

航空剣技は光るモノを感じさせ、戦闘本能や闘争心といった感情のコントロールも良く出来ていた。ただ惜しむべきは自分の力量を過小評価している所だろう。安全策と言えば聞こえは良いが男性の見立てだと彼が本来の力量を發揮する事が出来たらもう少し早くガジェット集団の殲滅が完了した筈だ。

それに思い切りはいいがガジェットの引き付けや反撃の判断が若干遅い。自分の戦闘スタイルを確立出来ていない証拠だ。これは経験を積みれば充分解決していく問題だ。

そして何より男性の興味を引いた事が彼の展開した魔法陣と魔力変換資質だった。

今は少ない古代ベルカ式の魔法陣に魔力変換資質『炎』。

彼女を助けて仲間にすると思った時、自分が一番最初に思い付いた彼女に適した最高のマイスターとして思い描いた小さい少年と一緒にであった。

男性がまだ管理局員として働いていた頃、聖王教会の教会騎士団から正式な依頼として何度か指導した事のある小さい少年。教会から期待され、必死に周囲の期待に答えようとして強くなるうとしていた少年。あれから随分と時間が過ぎた、あの時の少年も彼ぐらいの年齢になっているだろう。

そこで男性は彼の正体に気付く、教会騎士団のエリートとして選ばれた彼が何故、管理局の魔導師をしているのかは解らない。だが、確かにあの時の弱い少年は成長していた。

「どうしたの？」

「なんでもない、もういいのか？」

「うん、ガリユーが持ってきてくれたから……」

姿を現した紫色の髪をした少女の問い掛けに男性は自分が笑っていた事に気付く。若い世代の成長は自分がどのような立場になったとしても微笑ましく、嬉しかった。

「行くか……」

「うん……」

今の自分にその様な事を思っ資格は無い。

男性は自分自身を戒めると紫色の髪をした少女と共にホテル・アグスタを後にした。

## 第十七話（後書き）

シズクが命拾いしました。誰だかバレバレだと思えますが。男性とシズクが戦ったら戦闘にはならないでしょう、力量が違い過ぎて。

シズクと男性は面識があります、八神家が現れるまでの古代ベルカ式を扱う生き字引は男性だった訳ですから。

## 主人公紹介（前書き）

本編のきりが良いところで主人公紹介、あくまで紹介であり設定ではあしません。設定してしまうと本編の描写に矛盾が出てきそうなので。

## 主人公紹介

シズク・ローウェル

聖王教会の教会騎士団に所属する若手の見習い騎士。本来なら管理局に出向出来る様な立場では無いが聖王教会の思惑と六課戦力の底上げを目的とした部隊長である八神はやてとの利害が一致、何より本人の希望により今はレアスキルとされる程に扱う術者が居なくなつた古代ベル方式を修めているシグナム達の下で出向扱いの囑託魔導師として働く事になった。

実力はそれなりであり、戦闘能力『だけ』なら既に騎士を名乗れる程であるが判断力等の部分がまだ半人前の域を超えないので見習い騎士となっている。ただし、本人はその事に気付いておらず、カリムやシャツハもこの件についてはシズク自身で気付くべき事であるのでアドバイスはしていない。この為に騎士の称号を名乗る許可が出ない、もつと戦闘能力をつけると悪循環していて現在は戦闘能力『だけ』が独り歩きしている状態。六課に出向し、少しずつだが視野が広がってきている。

性格面では基本的に相手に敬意を払う様にしているが親しい間柄になると心の中では好き勝手言っている。異性に対しては歳相応、もしくはそれ以上に興味を持っているが一応、隠そうとしている。表情と態度にすぐ出るのでバレバレである。助平であり、本やテレビなどの情報媒体のおかげで多少は男女の機微に理解がある  
と本人だけが思っている。実際は相当疎い。流石に過度なスキンシップやデートに誘われる事があれば気付くであろうがちょっとした好意には全く気付かず、周囲の異性に対してフラグ建築を始める。

間違っても万人にモテるタイプの人間では無い。

## 第十八話

「一応、警護任務は達成という事で良いんですかね？」

「まーな、一時的にオークションは中断したらしいが今は再開したって話だ」

シグナムさん達と残ったガジエットの殲滅を終えて、エリアサーチでガジエット殲滅の最終確認をしているシグナムさん達と別れて、ホテル・アグスタの近くにいるヴィータさんと合流した。

先程までの騒音が嘘の様に静かで穏やかな空気が流れている森を見て、尋ねた僕の言葉にヴィータさんが渋い表情を浮かべながら同意する。

あれ？　もしかしなくてもヴィータさんって今機嫌が悪いよね？

恐らく向こう側にいるであろう正体不明の召喚師による不意の奇襲もなんとか対応する事が出来たし、六課の人間に被害は無い筈だけどなんで機嫌が悪いんですか。

正直に言って少し気になるが僕だってわざわざ藪蛇を突く様な真似はしたくない。ヴィータさんって子供の容姿をしていてどこことなく子供みtainな性格だけど基本的に大人である。人に迷惑をかける事や筋が通らない事をするとかごく叱ってくる。昔、一度だけ叱るでは無く、怒らせた事があつたけどその時のヴィータさんは本当に恐かった。

今、ヴィータさんが纏っている雰囲気は怒っている時のモノだ。怒

りを治めようとしているのは理解出来るが表情にも態度にもそれが出ていてなんとなく刺々しい。

ここはとりあえず違う話題を出してこの場から離れよう。この場所はヴィータさんが居れば充分だろう。都合良く、フェイトさんの手伝いをしているエリオ君とキャロちゃん以外のスバルさんとティアナさんがいない事だし。

「そういえば、スバルさんやティアナさんの姿が見当たらないですけど何処にいるか知ってますか？ エリオ君やキャロちゃんは現場保管の手伝いをしてるのに……」

あの二人の事だから万が一にも無いと思うけどエリオ君とキャロちゃんに現場保管を任せて二人は何処かでサボっていたりしたら流石にちよつと幻滅してしまう。

「アタシが知るかつ！」

「す、すいませんっ！」

僕の質問にヴィータさんが怒鳴ると僕は慌ててヴィータさんから離れる。

もしかしてヴィータさんが怒っている藪蛇はスバルさん達の事かもしれない。

「あはは、シズク君、今のはちよつと間が悪かったかな」

「あつ、シャーリーさん、お疲れ様です。えつと、間が悪いと言うのは？」

ヴィータさんから尻尾を巻く様に逃げ出した先にはシャーリーさんがエリオ君達と一緒に現場保管の仕事をしていて、逃げて来た僕の事に気付いて苦笑を浮かべながら励ましてくれる。

それにしてもスバルさん達の質問で間が悪かったって事はスバルさん達が何かやらかしたんだろうか。

僕は自分の事に必死で他を気遣う余裕が無かったから戦闘中に何があつたのか全く知らない。

「えっと、ティアナがちょっと張り切りすぎちゃってね。自分の実力以上の事をしようとして失敗しちゃって、コントロールを失った魔弾の一つがスバルに直撃しそうになったのよ。寸前でヴィータ副隊長が魔弾を潰して大事には至らなかつたけど……」

「そういう事ですか」

シャーリーさんの話を聞いて大体の事情は把握出来た。要は無茶したティアナさんとわざわざティアナさんを庇おうとしたスバルさんにヴィータさんは怒っている訳だ。

訓練中に起きた事ならまだヴィータさんだつてそこまで怒らなかつただろう。だけど、さっきの戦闘は訓練じゃない実戦だ。確かに無茶でもなんでも訓練で発揮出来る以上の実力を発揮するしか無い状況はある。それでも今回はそんな状況じゃ無かつた筈だ。

命が掛かっている実戦での失敗は罵倒されるべきモノだし、本来なら相棒であり、被害を受けそうになつたスバルさんが真っ先に怒らなければならぬ問題だ。

二人とも賢いんだからそれを理解した上で無茶をして庇った。それは多分、僕が知らない内面的な事情なのかもしれないけどそれとこれとは話が別だ。

「僕が心配しても仕方無い事が……」

そこまで考えて僕は首を振る。確かに二人の様子が気になるけど今は僕にもやるべき事がある。

そうして僕はフェイトさんに指示されるまま現場保管の手伝いをした。

## 第十八話（後書き）

うん、ヴィータってよくリインと一緒に子供扱いされてるけど実はかなり達観している大人だと思っくんですよね。書類仕事に厳しかったり、他人の為に本気で怒れたり。

## 第十九話

「ふう、大体こんな所で大丈夫かな」

はやてさんの気遣いとも言えるホテル・アグスタ警護任務参戦から一日後、通常勤務に戻った僕はホテル・アグスタでの戦闘記録を纏めたデータと睨めっこしていた状態から視線をモニターから外して身体を解す。

ブレイドに蓄積された戦闘記録からガジェットの動きや傾向を纏めて、AMF下での魔法発動状況や効率低下の度合い調査、次の戦闘時にどのような対策を講じるかの考察等のデータと書類を纏めるだけで今日の業務が終わってしまった。

正直に言って寝不足のおかげでかなり作業効率落ちてはいるけど僕がちよくちよく昼の勤務に廻される事で安定した睡眠時間が取れておらず、生活リズムがぐちゃぐちゃになっている事を知っているのが最低限の業務しかやらなくていい様にしてきている気遣いがある。申し訳ない気持ちもあるけど感謝の気持ちでいっぱいである。

「グリフィスさん、この書類とデータの提出お願いしますね」

椅子から立ち上がり、物凄い勢いで書類を処理しているグリフィスさんに僕が製作した書類を提出する。

「ええ、確かに受け取りました。今日はもう上がって貰って大丈夫ですよ。残りの業務は自分達が片付けておきますから」

顔を上げて軽く僕の書類に目を通したグリフィスさんはそう言うと再び書類を片付け始める。

うくん、ちょっと一緒に食事でもと誘える状況じゃあなさそうだ。ホテル・アグスタでの戦闘は結構大きな規模だったし、前線メンバーに余り負担が行かない様にロングアーチの皆さんが頑張ってくれているんだろう。

しょうがない、食事は一人で取る事にしよう。食堂に行つて誰か居れば一緒に食べさせて貰えばいいだけの話だ。

「ありがとうございます。それじゃあ今日はこれで、お疲れ様でした」

頭を下げた挨拶をした後、僕はそのまま食堂に向けて歩き出す。

「あれ？ どうしたんですか、ヴァイスさん。こんな朝早い時間に起きてるなんて珍しいですね」

食堂へ向かう途中になにやら外を眺めているヴァイスさんを発見して声をかける。確かにこのぐらいの時間から昼勤務の局員も起き出してくるけどこんな時間にヴァイスさんを見かけたのは初めてだ。

もし朝ご飯を食べていないなら誘ってみようかな。

「ん？ ああ、お前さんが、夜勤業務ご苦労さん。珈琲でも奢つてやるっか？」

「いえ、今から食堂に行くので。もし良かったら一緒に食べ

「まさか、ヴァイスさんがまだ食事を取ってなかったらの話ですけど」

心ここにあらずと言った様子で外を見ていたヴァイスさんは僕が声をかけた事で僕に気付いて視線をこちらに向ける。

「悪い、ちよつと気になる事があつてな……」

僕の問い掛けに歯切れの悪いヴァイスさん。そんなヴァイスさんを不思議に思いながらなんとなくヴァイスさんが眺めていたであろう外の景色に視線を向けるとそこにはスフィアを展開して自主訓練しているティアナさんの姿が見える。滴り落ちる汗も拭わず一心不乱に訓練を淡々とこなしている。

「……………」

あれ？　もしかして僕、凄く空気読めない登場しちゃった？　まあ、ティアナさんとヴァイスさんだと結構な歳差になると思うけどお似合いかも知れない。真面目なティアナさんに飄々とした態度のヴァイスさん、中々相性は良さそうだ。

「お前、あいつの事どう思う？」

ヴァイスさんの発言に心臓が飛び跳ねた。ヤバイよ、これ完全にお邪魔虫だったよ。フォワードの皆と一緒に訓練をする関係でティアナさんと接する事の多い僕に釘を刺しに来たよ。何、どう答えれば良いの、なあなあで済ませてもなんか見抜かれそうだし、正直に答えて誤解を解こう。おしいけどね、お近づきになれたら良いとは思ってたけどね！

「可愛い……いや、綺麗だと思いますよ。性格も真面目ですけど堅物って訳じゃなさそうですね、話していても普通に面白いですから、お近づきになりたいって気持ちが無かった訳じゃないですけど……」

「……………」

うう、もう無理だ、沈黙が痛い。早くこの場所から逃げ出したい。あれか、三角形関係の修羅場なのか、べつに僕はティアナさんと付き合ってる訳じゃないのに。

「ちげーよ、真面目な話だ。騎士として、魔導師として、戦う人間として今のあいつをどう見る？」

僕の言葉に溜息を吐いて呆れているヴァイスさん。それでも尋ねられた時の視線は真面目なモノだった。

それにしても戦う人間として……か。

「そうですね、正直に言えば何処か焦ってる様に見えますかね。一緒に訓練していると時々あるんですけど冷静なティアナさんらしくない行動とかもありますし、なんと言うかこう……遠い目的地を目指す余り足元が疎かになっているみたい。表現しにくいんですけどそんな感じです」

先日のホテル・アグスタで起こしたらしい誤射は最も足る例だろう。

「ま、誰が見てもそんな評価だよな。一応、一緒に訓練してんだから暴走しない様に見張っとけよ。んじゃ、またな」

僕の言葉に納得した様子で頷いたヴァイスさんはそう言って去って

しゅんぽ。

えっ、僕にどうしてさよ？

## 第十九話（後書き）

うん、シズクは結構KYなんですよ。空気を読み違えると言つ意味で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0070w/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～騎士を目指す者～

2011年10月12日12時53分発行